



セックスした。



酔った勢いで

BBB
unofficial fanbook
Steven x Zapp

R-18



セ
ク
ス
し
た

酔
っ
た
勢
い
で

BBB
unofficial fanbook
Steven×Zapp

R-18

酔った勢いでセックスした。

みたいわ南国



この本は、個人製作、非公式のファンブックです。
原作者様・出版社様とは一切関係ありません。

二次創作をご存じない一般の方や、

関係者様の目に触れぬようご配慮をお願いします。

また、十八歳未満の方の閲覧は固くお断り致します。

酔った勢いでセックスした。

酔った勢いでセックスした。

夜の街では少々名が通っているレベルの遊び人、ザップ・レ
ンフロであるからして、普通だったらそんなことでは驚かない。
朝起きたら見知らぬ女と見知らぬベッドで裸で眠っていて、
名前すらまったく思い出せないがとりあえず作ってもらった
朝食を平らげたうえで彼女の家から出勤する、ぐらいなら彼に
とっては大して珍しくもない話なのだ。宵越しの銭は持たない
ヒモ暮らしもここに極まり、のらりくらりと生きているだけ
に、ちよつとやそつとではビビったりしない自信がある。

で、だ。

そのザップ様がなんで驚いていたのかというと、昨夜の相手
が見知らぬ女ではなく、それどころかよく知った同性の上司で
あったからだ。ふたりして全裸。仲良くベッドにイン。床
に散らばる互いの衣服、そうして違和感バリバリの尻穴とくれ
ば、さすがのチンピラも半泣きになるしかない。ともかく事実
を確認したくて、目覚めたばかりのザップは動揺に震えつつス
ティーブンの肩を揺すった。

「ス……、スタ、スターフェイズさあ……！ 起き、あの、
起きてください……！ これ、なにがあったんすかあ……!!?

お、俺、まさか、あんたでロストバージン……!!?

がばつ！と起き上がった伊達男の表情が一変、異界産のグロ
テスクなゲテモノを口に突っ込まれたような形に引きつる。そ
の賢いおつむで一切の状況を理解した彼は、神にでも祈るかの
ごとく一瞬天井を仰いだかと思うと、両手で顔面を覆って絶望
に沈んだのである。「なんてこった……」と呟きながら。

「ああ？」

なんだかイラつときてしまった。確かに昨夜のことはなにも
覚えちゃいないのだけれど、なんてこったって、なんてこった
ってあんた。掘られたのはこつちなんですよ。勝手に掘つとい
てんなクソでも食わされたみたいな顔せんでも。俺はクソかよ
いやまあそりゃああんたは昨日俺のクソの穴に突っ込んだん
だろうけども。

露骨な文句がそのまま口から飛び出なかったのは、相手の気
持ちも分からんでもないからだ。もし逆の立場だったら自
分だって、どう反応したか分からない。しかしそれにしたって
最低限のモラル的なものはあっていいはずで、女のように受け
入れる機能がない人間を手籠めにしてくれやがったのだから
せめてごめんとか、身体は大丈夫なのか、とか、そういった声

掛けをしてくれたつていいのに。けれど、こつちからそういう
たものを要求するのもおかしいような気がする。

ザップが己の中で悶々と格闘している間も、ステイブンは
石像にでもなったかのように動かない。悲しみに暮れる様子が
ちよつとばかりさまになっているのが非常に癪に障った。これ
だから色男つてのはずるい。

「は————……」

ザップは大きく溜息をついた。秘密結社の番頭役、臨機応変
に作戦を組み替え前線に指示を出す参謀、そんな彼が、こうい
うときには意外とまともに振舞えないのは意外だった。なんな
ら掘られた自分の方が、よほど落ち着きを保っている。むしろ
そこまでショックを受けられているとなると、それはそれで逆
に腹立たしいのだが。

持ち前の切り替えの早さで、ザップはベッドから下り、黙っ
て衣服を身につけた。女相手であればこういう時間のうちに多
少のリップサービスもしたであろうが、今回はこつちが女役だ
し。労われているわけでもなし。なら、こうするしかないのだ
ろう。

「も、俺、帰りますんで。なにがあったか覚えてないですし、

あんたも覚えてないんでしょ？　つてことで、いつも通りでお
願いますね」

背中を向けてそう言ったので、ステイブンがどう受け取っ
たのかは分からない。ただ、返答がない以上、彼もこの話に乗
ったということだとザップは判断した。

「んじゃ」

部屋の扉を開けると、見覚えのない廊下に出た。手当たり次
第にずんずん進んで家の外へ出て、これまた見覚えのない街並
みにぽかんとしながら後ろを振り返ってみる。

（俺、あのひとん家に連れ込まれてやられたんかよ）

閑静で、高級そうな住宅街。早朝ともあればなお静かだ。美
しく穏やかな佇まいのなか、あらぬ場所がしくしくズキズキ痛
んでいる、あまりにも場違いな自分。

（ツイてねえ……、マジでツイてねえ……）

ひどく惨めな気持ちで、とぼとぼと歩き出す。手元のスマホ

で確認してみたなら、最寄りの駅まではまだかなりの距離があった。

とにもかくにも自宅に帰り、まずもってシャワーを浴びる。道中に垂れてきたのでほぼほぼ確信していたが、どうも直接なかに出されていたらしい。尻の穴に指を突っ込んだら、とても一回ではないであろう量の精液があとからあとから出てくるのには閉口した。

（あんひと潔癖っぽいのに意外とこういうところだしねえんだな!?)

職場の部下に中出しするなんて、と憤りを覚える反面、孕む可能性がないのだからある意味合理的なのかも感じて、なんだか余計に腹が立つ。イライラに任せて支度して、思いつき遅刻して出勤してやったが、さすがに今日はステイブンに咎められることはなかった。

フンと鼻を鳴らし、後輩のもじやもじや頭に手を伸ばす。「思

いつきり重役出勤してきてなんなんですかその態度アンタ——」という罵声を遠くに聞きながら、ザップは自身の胸に、繰り返し念じていた。

——忘れろ。

——忘れろ。

——要るもんは要る。要らねえもんは要らねえ。それだけだ。
——できる、俺なら——

（大丈夫）

幼い頃より檻褌雑巾に強制された地獄のような修行も、ライブラという安住の地へ辿り着くまでに過ぎてきたかさついた時間も。良かったとはいわないが、前に進むために必要だったと思えば一応納得はできていた。

それに比べて今回の事件の、イレギュラーではあるが些末なこと。もともと性に対して奔放なザップだけに、感情の処理はそこまで難しいことでもなかった。

ま、人生こーゆーこともあらあな。

そんな台詞で一刀両断。そして本当にスパッと、そのことについて考えるのを止めてしまったのである。

彼の生きてきた道の困難さにしてみればそうでもないや
ってこれなかったのだろうが、それにしても。あまりの思いき
りの良さ、他者からの理解を得難いまでの器用さは、この後の
展開の悪化に、残念ながら一役買ってしまったのである。

それから一か月が経とうとしていた。ザップの言葉通り、ス
ティーブンとはいつもと同じ関係が続き、もはや本人もあんな
出来事をすっかり忘れ去っていた頃だ。

今夜も、パーティー好きのボスの厚意で、難事件を解決した祝
勝会が開かれていた。

勝利の余韻にどことなく浮かれている面々、陽気な笑い声、
美味いつまみにアルコール。薄暗いバーにはザップの好む要素
がずらり揃っていて、これではしゃがないわけもない。他人の
金で飲む酒万歳とばかりにグラスを煽り、ほうぼうを回っては
肩を組んで騒いで、また飲んで。すっかり出来上がったザップ
はふらつきながら、しかし新たな酒を求めてカウンターへと向
かおうとしていた。

「おい、ザップ」

「ほえ？」

突然ぐいと腕を引かれて、転ぶかと思いきやローソファに着
地した。隣には見知った傷顔の上司が座っている。きらきら輝
くムーディな照明が、伊達男に華を添えていた。

「お前飲み過ぎだぞ。そんなに飲んだらまた……、」

「また？」

「いや……、とにかく飲み過ぎるな。セーブしろ、セーブ」

赤らんだ頬さえ幼く見えてしまうくらいのきよとした
顔つきで聞き返され、ステイブンは眉をしかめて口ごもった。
そんなリアクションに爆笑すらしてみせて、酔っぱらいは歌う
ように切り返す。

「おーーーーーげさつすよ番頭お！ そこのザコに取って
喰われるほど弱っちい俺ちゃん様じゃないですしい？ うま
いタダ酒があるんならどこでも！ パラダイスってやつです
からねー！」

ステイブンは絶句した。見事に言葉を失った。

ついほんのひと月前に、ぱくつと喰われちゃったばかりだろうお前。なんだその警戒心のなさは。お前にとつてあのことは、そんなに軽い出来事だったのか。僕にとつてあの夜にあったことは、とても、とても――。

ぐつと唇を噛み締めるステイブンをよそに、なにが面白いんだか、ザップは空中を指差してげらげら笑っている。狭いソファで姿勢も正さないの、ザップの身体はステイブンの腕にすつかり寄りかかっていた。彼の重みと、すぐそばにある体温を感じ、ステイブンの喉が鳴る。悪いことだと分かっている、どうにも止められるものでもなかった。

「……なら――」

ああ、口が開いてしまった。

「――うちにいい酒が何本か置いてあるんだけど」

断れ、断ってくれ。頼む。ザップ。

「ここ抜けて、飲み直さないか？」

「えーマジすかあ？ 行く行くうー！」などという返答に既視感を覚える。当たり前だ、誘い文句からして前回とまったく同じなのだから。あの晩のことをまるきり覚えていないのであればそうなくても仕方ないのかもしれないが、あんな目に遭ってもちつとも懲りていないなんて、ほんとにお前。

ステイブンは内心舌打ちをしていたが、覚悟はとつくに決まっていた。ああいうことがあったにも関わらず誘いを断られなかった、それがすべてだ。すでに賽は投げられてしまった。獲物を前にしたほの暗い高揚と、そうしてどす黒い怒りが、ステイブンの腹で渦巻いていた。身勝手だとは知りつつも、あの夜をなかったことにされるのが、どうしても嫌だったのだ。

「……」

しゅるりとネクタイを外し、ステイブンは己の寝室で、ベッドを――正確にいうならそこに横たわる泥酔状態のザップ・レンフロを見下ろしていた。

ここで彼を、この角度で眺めるのは二度目だった。男のくせ

に男に抱かれて、嫌な思いをしたらどうに。このバカは同じ方法で二度もこうして狼のぬぐらに連れ込まれ、美味そうな身体を無防備に曝している。

「……っ」

「ごくんと唾を飲む。先日味わった、彼の味を思い出す。まさかそこまで阿呆じやあるまい、と疑ってかかっていたのを裏切って、ザップはほいほいステイブンの自宅についてきたし、いい酒をすすめたらあつさり酔いづぶれてくれた。

途中で逃げ出してくれば良かったのに、リビングから寝室のベッドへ抱きかかえて連れて来ても、安心してふにやふにならなかったままである。お前、この前俺に犯されたばかりなんだろうが。じとりとした視線で彼をにらみつけても、格好の餌食、だとか、据え膳、だとか、そんな単語が次々浮かんでくるばかりだった。

前後不覚になったところを食うだけなら、先回と同じになつてしまう。ならば、とステイブンは、わざと鋭い殺気を放つた。

「ッ!？」

途端に、気持ち良く酒気に浸っていたザップの顔色が変わる。飛び起きてステイブンを見、状況を把握しようと部屋に視線

を走らせた。

「さすがの反応だな」

「……ッ!？」

皮肉交じりに褒めてやって、押し倒しがてら唇を奪った。瞼を閉じることもできずに目を白黒させているザップの舌をちゅう、と吸い、先端を甘噛みする。宣戦布告のキスを施して、ステイブンはザップと近距離で向き合った。不意打ちをくらった彼は、未だに驚いた顔のままだ。

「……え!? え!？」

「……言つとくがな。僕の誘いに、お前がついてきたんだぞ」だから無罪なのだ、そう主張するつもりもないが。先日と違って覚醒しているザップを前に、しかしながら勝算は揺るがなかった。むしろ、彼を追い詰めるにはこの方法が最適なのだとすら思う。

「……ス、タ……! んんん……っ♡」

まだ事態を飲み込みきれていないのにも容赦せず、深く深く口付ける。ベッドの上でのそれも込みでハニートラップを仕掛ける男の経験則からすると、負ける気は微塵もしなかった。キスは呼吸も許さないほど強引に、唾液を押し込んで立場の上下を教え込ませ、それでいて身体に触れる際にはあえて焦らして――、と、初回の情交の際心得た要領で性感を急激に高めてやる。

真正面からぶつかれば戦闘力そのものはこちらが劣勢、頭脳勝負に持ち込んでようやく五分五分、そうステイブンは見込んでいられるけれど。今だって本気で暴れられればそうとう厄介なのだが、すべてがステイブンの予想通りに進んでしまっていた。なにせ、彼は感度が良すぎるのだ。案の定、銀の瞳は快感にとろけ、もっとくださいとねだっているかのようだった。

「……ふえ……?♡」

「ああ、ザップ……♡」

あのときもすごかったが、きちんと意識を保っていたにも関わらず流されてしまっている、今回の方がよほど本能にグツとくる。あまりにも自由なこの男が己の与える快楽の前で身動きがとれなくなっているのだと、そう理解すればするほど下半身に血流が集中するのを感じた。

「あ、あんた、また酔って——」

「……はは。どうだろうね」

酔ってるのかって? そうだ、酔っているとも。なににとは言えず、ステイブンは笑って誤魔化す。口付けながらザップのトップスを脇までめくりあげ、あちこち傷のある肌に直接触れた。

「……っ!♡」

「おやおや……♡」

一か月ぶりに触れる彼の素の肌は、それでもステイブンを

歓迎しているように見えた。やわやわ撫でて煽ってやるとぶわ、と一気に鳥肌を立たせ、折れそうなくらい細い腰が期待を滲ませて細かに跳ねる。

「お前はあの夜のこと覚えてないって言ってたけど……。カラダの方はしつかり、僕のこと覚えてくれたみたいだね……♡」

「~~~~~なっ、ひあ?!♡」

触つてもいないのにびんと勃った乳首へステイブンがかじりつけば、ひととき大きな嬌声が上がった。はっとしたザップが思わず、自分の口を両手で塞ぐ。邪魔が入らないののいいことに、ステイブンは左右の乳頭を、唇と指とで同時に愛撫し始めた。

「~~~~~ちよ、つと、スターフェイズさんん……っ!♡」

「この間もここですごく善がってたもんなあ。こんなカラダしといて、プレイボーイ気取りだなんて笑わせる……♡」

ザップの思考は未だ現状への困惑という段階で止まっており、こんな危機に対応などできるはずもなかった。しかし身体だけは与えられる快楽にのぼせあがって、勝手に昂ってしまった。そんな場所をいじられてどうかなるなんてまさか女でもあるまいし、と、脳内で否定してみたところでおさら混乱するだけだった。

おまけに、「この間も」と言われてしまうと反論すらできや

しない。覚えていないのは事実だけれど、確かに、己のこの反応はどうもおかしい。こんなの、誰かに開発されてしまったとした——。

「ひあううううんん……っ！♡ あ、あ、いやら、いやらああああああ……っ！♡」

「ん——♡……♡ こんなに尖らせちゃって、はは……♡

♡ 気持ちいいんだね……♡ ……カワイイよ、お前……♡」
「……………♡ あああああ……っ！♡」

左右いつぱんにぎゅうつと摘ままれてしまつて、こらえきれずに喘ぎが漏れる。頭が現実を追いつかず、動揺から視界まで潤むのに、興奮ぎみにこちらを見つめている伊達男の表情だけはよく分かった。

「……イってしろよ。ここだけで、イってみる……！♡ もう二回目だからな、お前ならイけるだろ。なあ、天才のザップ君？ こっちの才能もあるなんてなあ……♡ ほら、見ててやるよ。乳首いじられるだけでイってみな……♡」

「っひ、ぐ♡ うううん、んん……っ！♡」

撫でてこすって摘まみ上げて、男っぽく太い指のくせに、動きはやけに繊細だった。それに、なにより良くないのは彼の視線だ。甘ったるく目尻の垂れた紅鵝色の双眸が、一瞬たりとも見逃すまいと高揚しつつじっとこちらを見つめている。凝視といつてもいいようなその力強さに、己の内側まで暴かれてしま

うような気さえした。そんなのは嫌だし、怖いし、逃げ出したいの。とにかく熱くて、身体が熱くて、やけに周りにはああいうさい思ったら、それは自分の呼吸音だった。感じてしまっている変に自覚させられたのとはほぼ同時に、赤く熟れた尖りをぎゅうううう……っ！♡と引つ張られる。

「あ……、あつ！♡ だめ、乳首だめっ！♡ そんなにしたらだ……っ、ひいいひいいひいいひいっ！♡ んんんんん、いやら、いや……っ！！♡」

肉の薄い胸が引き上げられ、育ちかけの乳房のようにかたちを変える。ぴん♡ぴん♡ぴん♡ぴん♡ぴん♡と連続して摘ままれて、おまけにきゅうつとひねられてしまったならもう限界だった。

「ふああああああああああつ！♡ ああああああ、あ——♡……♡……♡……っ！♡」

ザップは仰け反り、快感の発生源となった胸先を突き出しながら淫らに喘ぐ。押し掛かれているがゆえに自由のきかない下半身を小刻みに前後させ、着衣のままに射精した。じつとり湿った布の温さに罪悪感を覚えつつ見上げれば、べろ、と舌なめずりをする狼と目が合ってしまう。

「……はは♡ 上出来、上出来……♡」

「ひうううう……っ♡」

まだ少し硬度を保っているペニスへ、ボトム越しにステー

っ♡ 怖いからやだっ、やだああああああ……っ！♡」
 「落ちて着けてザップ……♡ だーいじようぶ、ちゃんと入る♡ この間だって入ったし、ほら、ほら、よく確かめてごらん……♡ お前のこころ、お利口さんに僕のを銜え込んでくれているからさあ……っ！♡」

「んおおおっ♡ ほおおおお……っ！♡」
 ずるるる、ずる♡と入り込んでくる異物の感触に集中してしまうのも、それはそれで良くなかった。大きくて、太くて、いやらしくびくびくしているものが己の内に入ってきているのだ、と思うと、頭が変になりそうだった。極度の恐怖と緊張は、もしかしたら、興奮によく似た作用があるのかもしれない。そうでなければどうして、こんな風になってしまったらうだろう。望まぬ侵略を受けているのに、ザップの性器は、また勃起し始めていた。苦しいはず、つらいはずなのに、どろどろとした熱に全身が支配されつつある。

「……っ！♡ ……ね、入っただろ……♡」
 「……………っ！♡」

ず！♡と奥深くまで穿たれて、ザップの尻とステイブンの下腹とがぴったり触れ合う。繋がったままザップに押し掛けられ、ステイブンは艶っぽい声色で喋り続けた。

「あ……………気持ちいい……♡ お前のなか、気持ちいいよザップ……♡ セックス好きだろう？♡ 気持ちいいも

んなあ、俺も、お前も……♡」

「……っ、あう、う……♡」

「さあて、動くよ♡」

「！♡」

一瞬間覚悟したけれど、想像したような痛みは来なかった。激しく抜き差しするのではなく、ステイブンは挿入した状態で、ゆさゆさ腰を振っている。自分の快楽を優先しがちなザップであれば絶対にしないような責め方に、テクニクの優劣を突きつけられた気分になった。硬いもので胎内を掻き混ぜられたなら、女みたいに甲高く喘ぎが漏れてしまう。

「あ、あ、あ、あ、あ、あ……っ！♡ ナカ、が、ナカああああああ……っ！♡」

「ん……………？ 気持ちいいかい……♡」

「ひえあ、う、ううううう……っ！♡ んあああああ、あ……っ！♡」

ぴつたりくつついて、ひとつの大きな熱の塊のようになって互いに息を乱す。上司であるステイブンに耳元で囁かれると、まるで命令を受けたかのように誤認して、自分の価値観がどんな書き換えられてしまう気がした。肝心の記憶がない分、ある種未知とも言える受け身の感覚に対して、これは「気持ちいいコト」なのだと勝手に定義づけがなされてしまう。己は気持ちいいことが好きだったはずだ。セックスが大好きだったはず

だ。ではこれは？ 犯すのではなく、犯されるセックスは――。

「んにゃああああああああああ……っ！♡」

考える猶予も与えてもらえずに、新たな刺激がザップを襲う。ステイブンは肉棒でザップを挟りながら、耳殻を舐め、おまけに両手で乳首をいじりだしていた。思わず身体を跳ねさせても組み敷かれている以上逃げ場もなく、ただ醜態を曝してしまっただけだった。

「あ、あ、それだめえいっぺんにすんのだめっ！♡ むりっ、むりですうううやだやだやだやだやだっ、やだああああああああああ……っ！♡」

「ん、これ好きか♡ そうかそうか、気持ちいいね……♡」

「っひ、あ、！♡ あう、あう、あ……っ！♡」

これが好きなんだ、気持ちいいんだ、と、本人は置き去りで、身体に教え込まれてしまう。ザップのペニスは完全に反り返って、歓喜の涙を幾筋も滴らせていた。こんなの嫌だ、恥ずかしい、でも気持ちいい。全部がないまぜになって、どうしたらいいのかなんでまるで分からないまま、嬌声だけがだだ漏れていく。

「あ、あ、やら、いやあまたイク……っ！♡ またいつちやう、イヤだ、やあ、イきたくない……！♡ 俺、もお、こんなので

イきたくな……っ！♡ んんんんん、んんっ！♡」

「そう？♡ 残念だな……♡」

「……………ひ……っ♡」

なんてことを言ってしまったんだ、と気付いたところで遅すぎた。イきたくない、という発言を受けて、ステイブンは片手でザップの竿を握り、そこを堰き止めてしまっていた。そのうえ、逆の手では胸の尖りをいじりつつ、また腰を揺らし始めるのでたまったものではない。行き場を失くした切迫感、たちまちザップを追い込んでいった。

「……っああああああああ!?♡ イ、けな、それじやイけないっ！♡ スターフェイズさんっ、スターフェイズさ……っ！♡」

「イきたくないんだろう？♡」

「やああああ、ああああああああ……っ！♡ 揺ら、揺らさないでええええええええ……っ！♡」

ゆらゆら揺れるステイブンの動きに翻弄され、乳首をきつく摘ままれては悲鳴を零す。必死に抵抗をしたって、勝てる見込みはゼロだった。握られっぱなしの性器が苦しくて切なくて、ザップの唇の端からたらりと涎が垂れ落ちる。戦場ではどんな拷問を受けても屈したりしない男が、なにものにもとらわれなはずだった生き物が、とうとう快楽に膝を折った。悔しそうに、細く、細く。ザップの喉が、空気を震わせる。

「~~~~~こめ、こめんなさ、い……も、イ
かせ、て……♡ イかせてえ……♡ つ!?!♡」
「よ、つと……♡」

精一杯の懇願だったのに、ぐつと腕を引かれ、さらにひどい状態に持っていかれた。先ほどまでと逆で、押し掛かられていたザップが今度は上になっている。男の下腹に乗つけられる格好で、いわゆる騎乗位と呼ばれる姿勢だった。

「……つう、うええええう……っ!♡」

「はい♡ ……いいよ、イきな?♡」

ステイブンはにつこり笑って、ぱつとザップのペニスを解放する。滾る欲は未だ燦っていたが、それぐらいでイけるほど甘い状況でもない。見知った上司、甘いマスクの傷顔の男と、ほとんど全裸で向き合っているのだ。おまけに、彼の男根は、己のアナルに深々と突き刺さっている。いかに繊細さに欠けるザップといえど、ここで呑気に射精できるわけもない。

「つみ、見られたら、イけな……♡」

「どうかな?♡ そんなことないだろ♡」

「……ひいつ!♡ ひ、あ、うう……っ♡」

くびれたウエストを両手でがっしり掴んで、ステイブンが腰を使う。ぐり♡ぐり♡ぐり♡ぐり♡と胎内で暴れられる

と、中途半端になっていた淫欲にまた火がついた。粘着質な視線を浴びていると分かっているのに、ザップの男性器が見る間に張り詰めていく。

「ほら見ろ♡ 気持ち良さそうにおっ勃てちゃってさ……♡」

「つて、だつて、勝手に……!♡ あう、あううううっ!♡」

足技主体で戦うだけに、ステイブンの腰遣いは恐ろしく正確だった。三度に一度はザップの弱い箇所を突いて、そのうえ強弱を組み合わせてくるのでやられる側としてはたまったものではない。とん!♡と狙い澄まして突き上げられるたび、ザップのそそり立った陰茎があらさまに大きく揺れた。

「う、ン……っ!♡ んん、んう……っ!♡」

「……はは……♡ 可愛いな、お前……♡」

「くっ、そ……!♡ ふうううう……っ!♡」

相手の思うがままにされて、後孔を穿たれ、男のシンボルを振り子みたいに振らされている。ぷりん♡ぷりん♡ぷりん♡ぷりん♡と勃起したペニスは珍妙な踊りを披露し、おまけに我慢汁まで噴き出し始めてしまった。ぴゅう♡ぴゆる♡ぴゅくんっ!♡と少量の体液を吐いて、性感の強さを勝手に主張しだす。それがとても恥ずかしくて、切なくて、焦らされてばかりの腹の中がしきりに疼いた。もつと、もつと強く、もつと悦く、できるくせに。追い詰めて、もつたいぶって、このひと

はなにがしたいかって、きつと——。

「く、うううううううううう……っ！♡」

悔しい。ザップは自他ともに認める意地っ張りだ。なのに、こんな風に好き放題されて、意のままにされなくてはならないなんて。それでも、快楽に弱い男にもう道は残されていないかった。人形のごとく揺らされながら、急所である喉を反らして曝す。そんなジェスチャーで訴えたところで軽やかに無視されてしまい、銀灰の瞳には涙が滲んだ。ザップの竿は相変わらず張り詰めて、より深い悦を切実に求めている。

「い、て、……もつと……♡ 本気、で……♡」

「ん？♡」

「くくく突いて、つてばあ……♡」

「うん……♡」

縫るように小声でせがんでも、ステイブンは乗ってこない。それどころか細腰を揺すぶって、さらに続きを促しているかのようだ。

「スタ、フェイズさあん……！♡ おれ、俺……っ！♡」

「ああ、うん、そう……♡ 呼んで、もつと……♡ 大きな声で、ザップ……♡ おねだりして、何が欲しいかって♡ 誰の、何で？♡ どこを、どうされたい……？♡ 誰の、どんなので、どこを、どうやって……、滅茶苦茶にされたいんだ？♡ ザップ、さあ、言ってごらん♡ さあ、ほら、早く……

っ！♡」

「んううう、くくくくくくくくくく……っ！♡」

ぎゅううう、と両手で臀部を鷲掴みにされる。薄い肉に指が食い込んで痛いくらいなのに、そんなわずかな刺激ですら決壊のきっかけになってしまった。ステイブンの垣間見える強引さに、どうしてだか流される。流されたくなくなってしまう。＼めちゃくちゃにされたい＼だなんて、思ったことなどないはずなのに。気付けばザップは表情をぐずぐずに崩して、甘えた声でこう言っていた。

「あ、あ……！♡ スタ、スタあ、フェイズさん……っ！♡ あんたの、あんたのっ、ちんぽで……！♡ あんたの、でっかいのでっ、俺のケツ……！♡ 突いて……っ♡ 突いてっ、ガン突きしてえっ！♡ イイとこ、分かってんでしょ……っ！♡ そこ突いてよおっ！♡ 俺のイイとこあんたのっ、突いて……っ！♡ いっぱい、いっぱい突いて、あんたのちんぽで俺のこと、メチャクチャにい……っあ、おとおおおとおおとおお……っ！♡」

「上出来だ……っ！♡」

がん！♡と待ち望んだひと突きがザップの弱い部分を抉つ

て、一瞬で絶頂まで追い込んだ。思いきり仰け反った褐色の上半身を背景に、びゅっ♡びゆるるるるー~~~~♡と、敗北の証が射ち上がる。

「つあ！♡もおイ、いつてりゆつ！♡おでづ、いつてりゆからあああああああああ……つ！♡」

「見りや、分かる……さ！♡ このっ、この……っ！♡」

「!!♡!?!♡うあ、あああああつ!♡やああ、あああああ——————————つ!♡」

怒ってでもいるのかと疑うほどの勢いで、ステイプンがザップを犯す。猛烈なスピードでこん！♡こん！♡がん！♡がわめき、そのまま再度射精した。やや薄い白濁が、あっちこっちにびゅくるるっ！♡と飛び散っていく。

「……思った通りだつ、エロい身体しやがって！♡ 逃がさないからな、ザップ！♡ 恨むんなら俺に捕まっちゃった自分の迂闊さを恨め……っ！♡」

「ひっ!? ♡ あ、なに、なに……っ!? ♡」

連続で果てたトロ顔を歪ませて、ザップが悲鳴を上げる。それもそのはずで、ステイプンはザップの陰茎をがっしと掴んでいたのだった。散々出した精液のぬらつきを借りて、上下に力強くしごいてやる。

「うあ!?!♡
♡ つちよ、おれイったばつか、だからあつ!♡

触らないでっ！♡ ちんちん触らないでスターフェイズであああああんっ！♡」

「はは、すご……っ♡ 手応えあり、だ♡ ザッブ、イけよ
このまま、ほら……っ！♡ 今キてるだろ、これでイったら物
凄いで……！！♡」

「んん!?　んんん!?　♡　ふえ、なん……っ!　♡　ああ、ああああああああ……っ???　♡」

イつておめいて涙を零して、パニック状態の神経を一気に塗り替えるみたいに、なにかが腹の底から湧き上がってくる。自分自身にはまったく状況が理解ができず、けれどステイブンが訳知り顔で口角を持ち上げているのがとても理不尽だと思つた。しゅ♡しゅ♡しゅ♡しゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡ちゅ♡とべニスを刺激されると、独りでに腰がかくかく揺れてしまう。自慰をしているみたいで恥ずかしいのに止められなくて、あ♡あ♡あ♡と唇からは意味のない単語が漏れる。ステイブンの言っていたように、なにかの訪れについてだけは確信があった。なにか、なにか来る。経験のないものが、『物凄い』ものが、もうすぐそこまで迫っている。止められない、止まらないう、これ以上はいけないと分かっているのに、それなのに――。

「あああああつ！　♡　ああ、　つひあああああああああ

「……………っ！♡」

濁った喘ぎは、さながら断末魔のようだった。それと同時に、ザップは無色透明な体液を尿道口から噴き上げていた。ぶしゅうううううううう……っ！♡と射出したそれは、精液というには薄すぎる。強張りの抜けない身体で、ザップは情けなくべそをかいた。

「っあ……!?♡ あ、俺え、しょんべん漏らし……っ!?♡」

「あは……♡ 違うよザップ、これ潮だ……♡ 女と一緒にだよ、男も出せるんだ♡ こんなにうまくいくなんて、こっちもビックリだけどねえ……♡」

「な……!?♡」

潮吹き絶頂。ポルノではお馴染みのシチュエーションだし、そういうのが得意な愛人だってザップにはいる。

ただそれを、自分がやってしまったというのだけは納得できなかった。だって、そんな。イヤラシイ女の代名詞みたいなやつ、鑑賞されて消費されるだけのほしたない行為を、まさか、俺が。

「っうううううんんん……っ！♡ ひやめっ、ちんこっ、やめええええええええええ……っ！♡」

「はっは♡ すこいなこれは♡」

思考を中断せざるを得ないペースで、ザップは次々に潮を噴

いていた。ステイプンが巧みな指遣いで裏筋を擦り上げると、いとも簡単に淫液が飛び出していく。びゅくんっ！♡びゅくっ！♡びゅくっ！♡びゅくっ！♡びゅうっ！♡と恥ずかしくなるくらいに元氣よく潮が弧を描き、そのたびザップの内壁がぎゅっと締まった。肉壁の歓迎を受けて、ステイプンの雄がますます膨らんでいく。

「おっ！♡ お♡ 潮っ♡ 止まんにやつ♡ やめへっ！

♡ いやにやのっ！♡ 潮おとおおとおお……っ！♡ むりっ！♡ これむりっ、潮吹きなんてもおこれ全然むりい
いいいいいいいい……っ！♡」

「ザップ……♡」

とうとう上半身を支えきれなくなつて、ザップはずるずる崩れ、ステイプンに身を預けた。びくん！♡びくん！♡と絶頂に伴つて不自然に緊張するくせ股だけは変に脱力していて、蛙を思わせる無様な形で脚が開いてしまっている。ステイプンはザップの男性器を責めていた手を外し、チョコレート色の尻肉を左右とも、目一杯の強さで挿んだ。

「ほんつとーにカワイイな、お前……！♡ アナル初心者なのに、潮噴きまくりでアヘアヘアクメかよいやらしい♡ ほら、このままじゃなかに出されちゃうぞ♡ また中出しされちゃうぞ♡ いいのか？♡ ヒモ暮らしが自慢のスケコマシなんだろ♡ 逆にこまされちゃう気分はどうだ？♡ な

た。

えげつない快樂。何遍もイカされて、女のように潮まで嘔かされて氣を失うまでやられまくつて。夜が明けきる前に氣付いて彼の腕から抜け出し無事逃げおせたけれど、数日経った今でも信じられない。ほんとに、夢じゃないんだろうか？

(俺、このひとにメチャクチャにされたんか……)

普段と変わらない様子で毎朝恒例のブリーフィングをしているスティーブンを、そつと目線だけで捉える。この色男はいったいなにを考えているんだろうか。この間はあんなに参っていたくせに、自分から部下を誘って、プライベートな空間で抱き潰したりして。

(男が好きなのか……?)

まさか、と即座に疑問が打ち消される。彼がいかにもバトロソくさい美女を連れ歩いているのを何度も見たことがあるし、先日のあの、絶望っぷりといったら。女のアナルだろうがザップのアナルだろうがやり心地は大差ないだろうが、やはり酒の勢いでうっかり男のそれを犯してしまったというのは派手な失敗だろうし、己が被害者でなければそれなりに同情すらしてやるところだ。

(だし、なんで二回目なんだよ)

懲りないやつのだ名詞である自身は置いておくとしても、スティーブンの性格上、同じミスを二度してしまうとはとうてい

思えない。過失でないなら、故意なのか。しかし意図的に野郎のケツを掘るというのにも腑に落ちない。抱くなら女が一番であつて、彼の見た目であれば一晩の遊びにも事欠かないであろうし、ましてや相手がザップである必要もない。孕まないだけ、というなら、商売女に避妊薬でも飲ませれば済む話なのだから。それを買うだけの金もツテも、秘密結社の番頭役であれば当然持っているはずだった。

(あああー……つ、クソ……!)

ザップの脳味噌は便利な忘却・および思考ストップ機能付きだが、なにかひとつのことを熟考するにはてんで向いていない。ただでさえややこしい上司の腹の内なんて、そんなもの考えたって分かるわけもなかった。ザップはがりがりと苛立たしげに頭を搔く。そうだ、事態は切迫しているのだ。

(……………やりてえー………つ!)

正確にはやりたい、ではなく、やらりたい、のだが。

目の前の、いかにも伊達男然としたスケベ野郎をザップは睨む。享楽主義の人間に未知の、それもどぎつい快樂を教え込んでくれたのだ。これが執着せずにいられるか。自分でもどうかしていると思うのだが彼の端正な顔立ちはもちろん、どこか動きに艶のある節くれた指も、スーツで隠しきれない鍛えら

れた身体のラインも、そうしてあの、立派なナニをしまい込んでいるであろう股間にも。つつい、ちらちら視線をやつてしまふ。あの夜の熱さ、激しさ、気が狂うほど善がった性感の深さを思い出す。

たとえば自身が女であつたなら、なんとかして彼を攫つて二人きりになつて、抱いてと追つてやつているところだ。実際男で良かったんだか、そうでないんだか。

(……………)

ザップにだって、必要最低限の倫理観は備わっている。居心地の良い居場所を守りたいなら職場の人間と色恋沙汰は避けるべきだし、なんなら恋愛抜きでの肉体関係だって褒められたものじゃない。ステイブンがザップに対してやらかした理由は分らないが、少なくともザップはそう思うからこそ魅力的なスタイルのチェインやほかのメンバーにも、むやみに手を出さないであつて。

ただ、どうしても、肉欲のやり場には困つてしまふのだった。あんなすごいのを知つてしまった以上もうなしではいられないし、肝心のステイブンには気軽に頼めないし。次に飲み会があつて、彼が酔っているみたいなシチュエーションが発生したならお持ち帰りを期待してもいいのかもしれないが、そんなのいつ来るかなんて分からない。ザップは今すぐ欲しいのだ。あの気持ちいいのを、今すぐに。

(ちくしよ……)

顔色一つ変えずにミーティングを終える、傷顔の男が憎たらしい。なんとかしなくては、なんとか。眉間に皺を寄せて考え込んでいたザップは、ちらりとステイブンが彼を盗み見ていたことに、まったく気付きもしなかった。

一日の仕事を終えてザップがやつて来たのは、いわゆるハッテン場とか呼ばれる飲み屋街だった。平たく言えば、性的対象が異性でなく同性である男たちが集い、出会い、ひとときの温もりや生涯の伴侶を得たりしている場所だ。これまで立ち寄ったこともなかったが、夜遊びの仲間から、なんとなく話には聞いていた。その筋の人間には有名なバーの名が書かれた看板をひと睨みして、ザップは肩をいからせ、やや警戒しながら中へと入って行く。

「いらつしやい。あらア、初めて見る顔ね」

「まあな。お喋りは好かねえからほっとしてくれ」

ドラアグクイーンというべきか、派手な化粧をしてオネエ言葉で話す店員に半分背を向け、ザップはカウンターへと腰掛ける。適当な銘柄の酒を顔すら見ずに頼むと、聞き分けのいい彼は黙って用意してくれた。ザップはグラスを傾け、ぐるっと店内を見渡す。

(なるほどね)

常連が多いのであろう店で、明らかにザップは浮いていた。格好も確かにそうだが、周りの視線がことさらにそれを際立たせていた。「新入りだ」「ノンケがからかいに来たか?」「こいつは上なのか、下なのか」と、品定めする男たちの目が一気にザップに集中している。

自分だってイイ女を見つけたら飛びつくし、なんなら美人じゃなくたって暇そうなら声ぐらいかけるけれど、品評される側に回るとそうとうに気分の悪い状態だった。俺は見せもんじゃねえぞ、と、イラついて、当初の目的も忘れてしまいそうになる。

「よお。隣、空いてるか?」

そう言って近づいてきたのは、髭面の、やたらにムキムキとがたいの良いスキンヘッドの男だった。皆がタイミングを窺っていたところを先んじて、その顔には嫌な感じの優越感をはつきりと表に出してしまっている。そいつが己に下劣な視線を向けているのを感じて、ザップはうげエ、と半目になってうめいた。確かに穴を埋める棒を探しちゃいたのだが、ここまでなんでもいいわけでもないのだ。

「悪いが空いてねえ、消えな」

「固いこと言うなよ。この店初めてだろう、仲よくしようぜ」

「お断りだ。ボランティアじゃねえんだぞ」

「つれねーなあ。まあ、気が向いたら宜しく頼むわ」

髭面坊主はさして気にもしてない様子で離れていき、それを合図に次から次へと男たちがザップに言い寄ってきた。若そうなやつから初老まで年齢もまちまち、エリート風からヤクザくずれまで。しかしどうにもピンと来ない。

(なんか、もつと、こう……)

だって、身体を預けるのだから。軟弱な野郎は却下、それなりに強くて、顔だって不細工はごめんで、身なりはもちろん香水の趣味が悪くない方がいいし、欲を言うなら声とか指とか仕

草とかに色気があるやつが良くて、たとえば高級スーツをさらつと着こなして歩けるくらいの、同性から見ても文句なしにイイ男だと思えるような――。

（ああ？）

ぱつと脳裏に思い描いたのはステイブ・A・スターフェイズそのひとだったので、ザップは眉をしかめてイメージを振り払う。だから職場はナシだつてんだろうに。そもそも、酔った相手に無体をはたらくようなクソホモ外道強姦魔にこれ以上関わるべきじゃない。たとえ、セックスが鬼のようにうまくいったとしても、病みつきになるような中毒性があつたとしても、テクだけでなくナニもなくて、死ぬほど具合が良かったとしても、だ。

「……」

ザップは一瞬考え込んだ。あのすつげえのをもう一回体験しない手はない。それこそステイブに頼めば、酔わせる手間がはぶけたと言つて喜んで抱いてくれるのかもしれない。いや本当にそうだろうか。酔った弾みで男に走っただけで、素面でお願ひしたらドン引きされるのかもしれない。そんな理不尽な。

でもあり得ない話とも言い切れない、とにかくあのひとは腹ん中でのなを考へてるのかさっぱりわからん。面倒くせえ、とにかく面倒くせえけど、このムラつきが収まつてくれないことには。

「や。ご一緒しても？」

「！」

大当たりだった。強いかどうかは知らないが、スラっとした長身、金髪、涼しい顔をした同年代くらいの男。モデルっぽい風貌は同性から見てもハンサムで、着ているものから選ぶ香水まできっちり高得点。ザップは思わず口を開いた。あとはたったひとつ、この点さえクリアしてくれば。

「俺はボトムだ。あんた、セックスうまいのか？」

ぱつと目を見開くも、似非モデル野郎は艶っぽく微笑んだ。

「そんなの、試してみなきゃあ分かんないだろ？」

切り返しとしては、まあ合格。ザップは黙って彼の手を取り、この会計と、ホテル代はそっち持ちだと言つてのけた。金髪男は驚いている様子だったけれども、意外とすんなりオーケーしたのでふたりしてさっさと店を出る。これで、準備万端。ベッドの上で天国をエンジョイできるかも、とザップは思ったのだが。

(……?)

なんだかしっくりこなくて、軽く首を傾げる。小さな違和感も、職場の上司のわけのわからなさも、はつきりいつてザップには荷が重すぎた。その両方から逃げ出してみたいに見知らぬ男の手をぎゅつと握る。「積極的だね」と笑みを向けられても、ザップは無言のままだった。

なんとなく、嫌な感じはしていたのだ。

モデル風イケメンと一発やってみたのだが、ザップの欲求不満はまったく解消しなかった。彼が下手くそだったのではなく

て、むしろ丁寧に抱いてくれたのだが逆にそれが煩わしかった。「もういいから突っ込め」と急かしてようやく挿入させても、充足には程遠い。結局彼とはその一回きりで、それから何人も別の男と寝てはみたものの、なにかが違つてしまっていた。

そもそもザップのお眼鏡にかなう人間というものがあまり多くなく、そのなかでやれナニが小さそうなの、やれキスが下手だったのいくらでもケチをつけられるので収拾がつかない。ラブホテルまで辿りつければ上々、ベッドの中での態度次第では「萎えた」と言い捨て相手を置き去りに即撤収、そんなことをしているうちに男日照りの期間が妙に長くなっていった。

毎晩出会い系バーには通っているし、声をかけられないわけじゃないのに。なぜだかどうも氣にくわなくて、全然本番を試せていない。ザップは今夜も仏頂面で、もはや定位置と化したバーカウンターの一席を温めていた。

「よおー尻軽の仔猫ちゃん。いよいよオレの番が回ってきたか？」

「てめーの順番なんざ一生かかっても回って来ねえよ。すつこんでろこの筋肉ハゲ」

「つたくツラは最高なのに口悪イなあおい！」

初日に声をかけてきた髭面スキンヘッドとも、今となつては顔なじみだ。軽口もほどほどに、彼に背を向け酒を煽る。当初は大人しく引いていた髭男だったが、最近は少し粘るようにな

ってきた。今日も、許可を得ようとすらせずにザップの隣の椅子へ陣取っている。そうしてにやにや笑いを浮かべたまま、勝手にザップに話しかけてくるのだ。

「だーから男は顔じゃねえつつってんだろー？ デイックの出来には自信があるぜ、オレあよー」

「うっせ。黙れ」

ザップがやたら面食いだということすら、もう皆に知れ渡っていた。まあ自分でもそうなんだろうなとは思ってから、適当にあしらってやる。

「顔が良くて？ 身なりが良くて、センスが良くて、おまけにチンコがでかくてセックスが上手いとか、役満狙うからハズすんだよ。ほどほどにしとけて。ナニがでかい、セックスが上手い。要はそこだろ？ んじゃ、オレ様の出番ってとこだ」

「……………」

「ここのところの悲惨な結果を振り返れば、耳の痛い指摘だった。確かに欲張りすぎなのかもしれない。たかが、気持ち良くなりたいたってだけのことに。」

「で、今夜はまた特別だ。とっておきのヤクが手に入ったんだよ。一錠飲めば、ハイになること間違いなし。イきまくりの泣きまくり、男だって潮噴きまくりで即行トリップできるって話だぞ。まだHLPDも勘づいてねえ、できたてはやはやの合法ドラッグさ。なあ、どうだ？ 使ってみたくねえか？」

「……」

潮噴きまくり、というくだりでぐくんと喉が鳴った。正直全然気に入らない相手だが、知らないやつでもなし。ほかが全部及第点以下だとしても、そのクスリさえ効いてくれたら。あの夜みたいにな、もう一度――。

「悪いが」

「条件ぴったりの男が、ここにいるんでね」

「……っ!? おわあっ!」

わざとらしく区切られた、色気たつぷりのテノール。

背後から突然声をかけてきたステイブンは、白いジャケットの襟首を掴んでザップを椅子から引きずり下ろしていた。絶対零度の眼光はあまりにも鋭く、射殺さんばかりの圧力でもって観衆を睨みつけている。

「何か文句でも？」

「……ありません……」

顔はいい。身なりも、センスもいい。おまけにナニがでかそ

うで、セックスが上手そうでもある。しかしそんな甘い顔立ちの伊達男がギャングもびっくりの異様な凄み方をしてみせたので、髭面スキンヘッド含め、店内のほぼ全員が瞬時に辣み上がっていた。思わず、返事が敬語になってしまふほどだ。

「釣りは要らないから」

高級ブランドのスーツを嫌味なく着こなしたいわくありげな男は、多すぎるほどの紙幣をカウンターに残し、すっかりフリーズしたザップをずるずる引きずりながら店を出ていった。騒動の種は見えなくなつたものの、あの男はいつたい何者なのか、という話題で、バーはしばらくもちきりだった。

「……つと、待……つ！　スターフェイズさん！　俺歩ける！　歩けますってば！」

飲み屋の連なる細い路地で、ずるずる襟首を引つ張られて進む。ゲイバーで男ひっかけようとしてたら職場の上司にバレて引きずり出された、なんて怪談よりも恐ろしい状況なのだが、とりあえずこの乱暴極まりない移動手段が喫緊の課題だった。

ずんずん無視して進まれて、いよいよ本格的に暴れてやろうかと思つたところではつと首を解放される。袋小路だ。唯一の進路を、怒りのオーラをしょつたステイブンが塞いでいる。「……な、なんなんすかあ、もう……つ！　せつかくいいところだつたのに……！」

「……どうもこうもあるかつ！」

切れかけの電灯がなんとか照らしているだけの暗い夜道に、怒声がびりびり響き渡つた。

「お前な！　噂になつてんだよ！　銀髪褐色の美味そうなネコが、いい棒探して毎晩うろついてるつて！　ちよつと顔が良けりや誰でもやれるぞつて、写真付きで出回つてんだ！　見ろよこれ！　馴染みの情報屋からこれについて質問されたときの、俺の気持ちがお前に分かるか!?!」

「うえつ……!?!」

ステイブンが差し出したスマホには、隠し撮りしたのであらうザップの横顔と、それに対するたくさんさんの書き込みが映し出されていた。夜遊び好きの人間たちが集う掲示板らしく、「どここのホテルでやってやつた」だの、「乳首がやたら感度高かった」だの内容にまったく遠慮がない。

一回きりでフラれてしまった腹いせなのか、「こいつマジ尻

軽！ 即ハメだったぜ」とのコメントと一緒にセックスの最中に盗撮したのである。白黒の画像を貼り付けている者までいる始末だった。どアツプになったザップのイキ顔へ、「永久保存したった」とか「これで每晚抜いてる」とか、「俺もイケメンだったらこいつのケツ穴壊れるまでガン掘りしてやったのに」などと、ひどい言葉が何百何千と並んでいる。どれもこれも、正面きつて言われたなら決して生かして帰さないレベルの台詞だ。匿名での交流にいつさい興味の無いザップは、まさか自分の行動によってこんな事態が起こっているとは露ほども認識できていなかった。

「~~~~~っな……!? これ俺!? すね、うわあハメ撮りとか、マジか……。つちくしよ、コイツ見つけてぜってーブツ殺してやる……! ああそんで、その、これは、まあ……。その、こういうことになっちまったのは確かに俺が悪かったすけど! でも俺の評判なんでもとそんなもんでしょ!? このせいでなんか具体的にライブラに迷惑かけてます!? いい加減ガキじゃねえんで、俺のこたあもうほっといてくれませんかね! ……だって、あんたには関係ないでしょう!!」

実際にはステイブンがきつかけだったのだから全然関係なくなんてないのだが、口を突いたのはそんな台詞だった。あくまで不幸な偶然でこうなってしまっただけであんたを責める気はないのだと、そういう気持ちから出たフレーズだったの

だけれども。その何倍もの大きな声で、ステイブンは怒鳴り返してきた。

「俺に関係ないだって!!」

――殴られる！

物凄いスピードで伸ばされた腕に、ザップは思わず身構える。強烈な打撃が来ると予想しての反応だったが、激しい痛みに襲われることはなかった。その代わり、唇に柔らかな感触がする。痛めつけられると思ったのに、ザップは両方の手首を取られ、壁に押しつけられて口付けられていたのだ。なりふり構わず、といった感じの、性急なキス。スマートさのかけらもないそれに、ぞくぞくぞく……っ♡と官能が呼び起こされる。

「……ふ、は……♡」

「もういっぺん言ってみろ、この節穴め……!!」

唇が離れる。けれど、ザップは動けない。背後の壁を利用して、ステイブンの両手の檻に閉じ込められているからだ。

「顔が良くて？ 身なりが良くて、センスが良くて、おまけにナニがでかくてセックスが上手い奴がいんだって……!!? いるだろ!!? いるじゃないか、ここに！ 頭だけじゃなくて、お前は目も悪かったのか!!? どうして僕じゃ駄目なんだ！あのちんけな店に、僕以上の男がいたい何人いるって言うんだよ!! 答えろ、ザップ！ どうして、どうして僕じゃ駄目なんだ……!! お前はちつとも、こつちの思うように動いてくれないで……っ！ くそっ、お前はいつもそうだ！ いつもそうやって、僕を、僕を……!!」

「……は？」

間近でぶつけられる言葉の内容にもびっくりしたが、最終的にはステイブンの声が震え、おまけにぼろっと涙をひとつぶ零したのでさらに仰天してしまった。職場の上司、秘密結社の裏も表も仕切る、腹に一物抱えてそんな副官。彼についてはそれくらいのことしかザップは分かっていたのだけれども、ここのことといえは酔った勢いで抱かれてしまったし、ゲイバーで男漁りをしているところをとつ掴まるし、なにもかもが理解の範疇を越えている。

「や、ちよつと、なんなんすかね？ な、なんつーかそれ……!!」
完全にキャパ越えの脳味噌で、ザップは無意識に口を開いていた。なにも考えていない、なにも考えられていないがゆえに、

今一番疑問に思っていることが自然と音になっていく。なにせ、なにか深刻そうな雰囲気は十分伝わっていたのだが、話の前半のインパクトがありすぎて、ほんとと頭に入って来ていなかった。

「……イヤ、あんたそれ、マジで自分で言っちゃうんです……!!? 顔と身なりとセンスが良くて、ナニがでかくてテクニシヤンって本気で……? そりや事実かもしれないですけど確かにそうかもしれないですけど、いつくらなんでも自分に自信ありすぎじゃないですか……っ!!?」

「ああ？」

面食らったステイブンが、涙の滲む瞳をまんまるに見開く。どこか遠くで野良犬が、アオーンと遠吠えするのがうつすら聞こえた。

「いやー、あんときはもう、思わずツッコまずにはいられなかったんですよ」

「お前その話、何回すれば気が済むんだよ……」

高価な家具が行儀よく並んだ広いリビングで、ザップとステイーブンはソファに腰掛け、就寝前のひとときを過ごしていた。仲良くびったり身体を寄せて、手にしたビールで気持ち良く喉を潤す。

ほんのり顔が火照るくらいには酔っぱらっているけれども、ふたりの周りの空気は非常にリラックスしたものだ。ひとけのない路地で言い合いをしたあの夜にاندかんだで付き合ってみるようになったので、流れからいえばまあ当然のことなのかもしれない。ザップとステイーブンは、お試し期間中とはいえ、恋人同士になったのだから。

「ふふ。そんで、こんなイイ男なのになんで僕じゃダメなんだってテンパって泣いてみせたあとの、あんたのダダのこね方がもうねえ……!」

「恥ずかしいから勘弁してくれよ!」

わっと大げさに叫んで、ステイーブンが赤い顔を手で覆う。あのとときのやりとりを、ザップは改めて思い起こした。

『……イヤ、あんたそれ、マジで自分で言っちゃうんです……!? 顔と身なりとセックスが良くて、ナニがでかくてテクニシ

ヤンって本気で……? そりゃ事実かもしれないですけど確かにそうかもしれないですけど、いつくらなんでも自分に自信ありすぎじゃないですか……っ?!?!』

『ああ?』

ステイーブンは一瞬ぼかんとしたが、すぐにぎゅっと唇を引く。

『……俺にはそう見えてたし、人からもそう言われるから、間違っていないと思ってただけ……でも違うのか? お前にとって僕は、何の魅力もない人間だったのか?』

『あつ、いや、そういうわけじゃないんですけど……』

『だとしても、だ』

潤んだふたつのガーネットが、ザップを見据える。

『それでも僕は、願わずにはいられない。適当な奴に身体を任せるなんて、金輪際やめてくれ。どうしてもと言うのなら……、どうか、僕を、使ってくれ。お前がその辺のどうでもいい輩にいいようにされてしまうなんて、僕には耐えられないことなんだ。都合のいい道具だと、単なる棒だと思ってくれていい。予定も全部合わせるよ、お前が満足出来るように精一杯やる。忙しかろうがなんだろうがいつでも欲しいだけ気持ち良くさせてやるから、だから、お願いだ。もうこんなことは止めてくれ。後生だ、頼むよ、なあザップ……!』

『え? あ? え……?』

話が飛躍し過ぎて、まったくついていけない。ステイブンを使う？ 都合のいい道具にする？ あの冷血な鬼上司が、必死になってザップに譲歩を求めている、ような感じがした。だんだん頭を垂れてしまったので今や彼の頭頂部しか見えず、表情からヒントを得ることすらできない。そんなに一生懸命になって、なにを求めているのか？ ザップにはまるで分かんかったが、すぐに答えは明らかになった。

『……僕は、お前が好きなんだ。ずっとずっと、好きだった——』

『エッ』

今度は、ザップがぼかんとする番だった。

誰が、誰を、好きだった？ 彼の日頃の態度を思えば、今の発言はなにかしらの間違いにしか聞こえない。ただ直近の、なんでもするから自分を使え、ほかのやつものになんてならないでくれ、という懇願に結びつけるとしたら、なるほどそうかと合点がいった。あんたは俺が好き。俺は気持ちいいのが好き。あんたは俺を気持ち良くさせんのがうまい。ってことは、俺はあんたと一緒にいたら、いつだって超気持ち良くなれるってワケ？

『……っし！ んじゃいっぺん、お付き合ひしてみます!?!』

信じられない、という顔をしたステイブンを見下ろして、ザップはふふんと鼻を鳴らす。ここ一番の思いきりの良さは、扱う技の切れ味のごとし。銀灰の瞳に爛々と意気がみなぎっているのを見てとって、伊達男はようやく呼吸の仕方を思い出したかのように、ほう、と静かに息を吐いた。

『………名前』

『ん？』

『呼び方、変えてくれないか。ファミリーネームじゃなくて、下で……』

『ああ……。いっすよ、』

なんだかくすぐつたい気分になって、ザップはちよつと笑ってしまった。はにかんで、視線を合わせる。そうして、彼の名を呼んだ。

『……これからヨロシクお願いします！ ステイブン、さん！』

『……っし！』

感極まって口付けてきたステイブンを受け止め、その頬が新しい涙で濡れているのに気付いて、ザップは喉の奥でまた笑う。

「……なにこれ、このひとちよー俺のこと好きじゃん……?!
こんな見た目で、アホみたいに強くて、頭良くて仕事できて、
あんなけエグイセックスできて、それなのに、それなのに、」

——このひと、実はめっちゃくちゃ可愛いんじゃない?!

一度思ってしまったら、あつという間に虜になっていた。あれだけ何人も試してしつくりこなかったのが嘘のように、急に納得できてしまった理由がさっぱり分からなかったけれど。ザップにとってそれは、割とどうでもいいことの範疇だった。

だって、これからはきつとこのひとに気持ち良くしてもらえ
る。もう、夜な夜な男を探して出歩いたりしなくていい。ハズレを引いて、徒労感にがつくりしたままとぼ帰宅なんてしなくてもいいのだ。気分はハッピー。超ハッピー。正体不明のヤクなんかなくても、今この瞬間からアゲアゲだ。

単純な作りの脳味噌に生まれて良かったアと頬を緩めながら、ステイブンの熱い接吻にとことんまで応えてやる。もう二度と離すものか、ときつく抱き締められているのだが、こっちだってあんたみたいな上物逃がしやしませんよ、とザップは思っていたのだった。

「あー恥ずかしい……。僕すっごい格好悪い……」

「まあね。カッコ悪いって言やあ、あんた初めてやつちやつた日の朝のこと覚えてます? 被害者である俺をほっぽって、ひとりで勝手に落ち込んだやつ。あれもそうとうカッコ悪かったっすよね」

「おい、フオローはゼロか!? ゼロなのか!」

シヨックを受けている様子のステイブンを、ザップはしれつと聞き流す。切り替えは早いほうなはずだが、とはいえ結構傷ついてたんだななどと、他人事のように思った。

「……悪かったよ。女好きのお前相手に可能性とか微塵も感じてなかったから、この気持ちは墓まで持っていくつもりだったんだ。なのに酔っぱらってうっかり手を出しちゃうなんて信じられなかったし、こんなことになったらいよいよお前に嫌われるのは確定事項だろうなって……。ひよつとしたらライブラもやめちまうかも、戦力的にももちろん困るが、もしかしたらもう二度と会えないのかもしれないって思ったら、身動きとれなくなってたんだよ」

「……すぐ謝るぐらいしたらいいじゃないですか。許してもらえませんかもしないし」

「だから、それが出来ないくらい参ってたんだよ。バグってたんだ」

「バグねえー……?」

感覚主体で動いているザップには、ステイブンの話はそこ

そこ意味不明だった。考えすぎて変になるくらいだったら考えなきゃいいじゃねえかと思ってしまうあたり、そもそも根本的な部分が理解できていない。わけわかんねえなあ、という感情に引つ張られて、ザップはなんとなく思いついたことを口にした。

「二回目やつちやったのも、そのバグすか？ 頭おかしくなつてたってこと？」

「ああ、それは……」

ももごととステイブンが口ごもる。ザップは視線で、続きを強く促した。

「……それは、バグじゃなくて。迷ってたけど、ちゃんと考えてやった。お前をどうしても諦めきれなくて、ならカラダから落としてやるしかないかなって」

「はあああああああ……~~~~~~~~っ!!?」

至近距離で大声を出されて、ステイブンは手で耳を塞ぐ。だから言いたくなかったんだ、と愚痴をこぼしてから、しぶしぶ続きを話し始めた。

「どうせ覚えてないんだろうけど、初回からすっこかったんだぞお前。初めてだったくせに後ろで何度もイって、揺すつてやったら気持ち良さそうに喘いでさ。終いには、『ナカ気持ちいい♡ もつと、もつとお♡』なんて言い出すから、僕もたまになくなって直接中に出すだろ。で、お前が大喜びしていきま

くるから、こつちだつて止まなくなるだろ……！ そんなボトムの才能ありまくりなお前があんなことがあったにも関わらずたらふく酒飲んでフラフラしててさ。こんなんじや、いっどんな奴に喰われちまうか分かったもんじやない……、じやあやってみるしかないだろうって思ったんだ」

「……うー……」

今度はザップが口元を押さえる。懲りない性分はいつものことだが、改めて指摘されると結構きつい。

「勝算はあったんだ。僕の技術のすべてを味わせてたっぷり可愛がってやつたら、絶対お前を骨抜きに出来るって思ってた。それが、あんな……。まさか、男漁りに走るだなんて……」

「……はは」

わざとらしく天を仰いでみせるステイブンから、ザップは気まずそうに顔を逸らした。馬鹿なことをしてかした自覚が、まったくないわけじゃない。

「……だって、あんたがなに考えてるのか全ッ然わかんなかったんすもん。興味本位でおかしなこと覚え込まされて、おかわりがあるかどうかもわかんねーのに大人しく待ってなんていらんないじゃないすか。これでもねえ、自分でもうにかできる範囲で真面目に努力してたつもりなんです、俺は」

「……お前の堪え性のなさを、甘く見積もってたか……。それとも、誰彼構わず引っかけようとする貞操観念のなさを読み違

えたか。なんにしても僕の計算ミスだったみたいだな。その時点でもはや盛大にバグってたんだろが、自分じや気付けないもんなんだなあ、ほんとに」

「ひでー言われよう！ 元はと言えば、あんたがさっさとコクつてりや良かったんでしょ!? そこからつすよ、間違いは！」

「馬鹿言え」

ステイブンはむっとして、ザップにぐいっとな顔を寄せる。

「まともに告白なんてしてたら、お前秒で断っただろ。男同士なんてあり得ないって思っただろ？ 少なくとも、二回目のセックスが無かったら確実にフラれてたね。断言したっていい」

「ん……………」

言われてみればその通りで、ステイブンがアリだと感じられるようになったのは、セックスが気持ち良かったからだ。強烈なオーガズムこそ、性別の境界線をも超える鍵だったのだ。おとなかカッコイイじゃん、と脳内で自画自賛したところで、なぜだかムラっとその気になった。気分も良くなってきたし、そろそろ頃合いだろう。合図代わりに、ザップはするりとステイブンの手に手を重ねる。

「まあね、過ぎたことはいっすわ。マジ惚れした相手には脳味噌バグっちゃう頭脳派とか、可愛いすぎるってもんですし」

「！」

つつ……♡と指をなぞる仕草に夜の気配を感じて、ステイ

ブンが息を呑むのが分かる。お試し期間中とはいえ、そういうリアクションをする恋人に対してちょー可愛いな、という感想を抱く程度には、ザップだって惚れ込んでいた。

「やらかした分は、カラダで返してもらいましょ♡ 今日も気持ち良くしてくれるんでしょ？ ね、ダーリン……？♡」

わざと声をひそめて、耳元で囁く。付き合う前なら、「勿論だよハニー」なんてさりとってのけ、キスで応じるステイブンを想像していたと思う。ただ実際は、どぎまぎと赤面して、無言でぎゅっと手を握り返してくるというのが正解だった。そのくせぎらぎら目の奥を輝かせて、雄っぽくがつついてくるのだからたまらない。ああそんなに俺が欲しいんだあと、なんだかこそばゆい気持ちにすらさせられる。

だからザップはくふくふ笑って、ステイブンに連れられるまま、二階への階段を上がっていった。寝室のベッドに座らせると、ステイブンは黙ってすぐに部屋を出ていく。おそらくは自室に向かったのだろう。そこで彼がなにをするつもりなのかもほぼ予想がついていたので、ザップはベッドに無防備に転がり、小さく笑いながら愛しいひとの帰りを待っていた。

「うわぁー。やーらし♡」

やけに楽しそうに、ザップは言った。寝室に置かれている大きな姿見には、恋人が手渡してきた性的なコスチュームを纏っている、自分自身が映っている。

「あんた、んなスカした顔して……♡ こういう趣味もあつたんすねえ?♡」

ファッションモデルよろしく、鏡の前でザップはあれこれとポーズを決めた。下衆な異国情緒漂う本日の衣装はいわゆるJK風とかいうやつで、ジャパンでは人気があるらしい。ハイテーンの女の子が着るものというだけでも背徳感がすごいのだが、ザップのそれは大人のお愉しみ用で、さらに凄まじいことになっていた。

白いラインの入った紺色の襟が特徴的な上衣は、極端に裾が短い。臍どころか乳首が半分覗いてしまうくらいのもはや着ている意味が分からない代物だった。いかがわしさを出すという文脈でなら、確かにその通りかもしれないが、

襟の下を通り、裸の腹へと、赤いリボンが垂れ下がる。ネクタイの形ならまだしも大きな蝶々結びになっているそれは、よく引き締まった男の腹筋と並ぶと、醸し出す雰囲気の違いが強く

烈だ。

下衣はプリーツタイプのスカートなのだが、これも輪をかけて様子がおかしい。股上股下どちらに対しても寸足らずな印象で、ほとんど陰部が見えるんじゃないかというくらいローライズなのに、下端はようやく股が隠せているだけ、というギリギリのサイズ感だった。裾広がりのラインになっているのでそう見えづらいが、スカートというよりは腰巻程度の役割しか果たしていない。折り目のきっちりしたプリーツが揺れると、ちらちらちら内股や尻が見えてしまう。

いかにも淫猥な格好を満足げに眺めると、ザップはにやにや笑いを浮かべつつ、ベッドに寝そべっていたステイブンに向き直った。

「できましたよ〜」

「……………はは。すごいな、これ……………♡」

「ぶはっ!! ちょっとステイブンさん、その顔!」

落ち着きなくベッドから起き上がり、でれっというかへつというか、その整った顔立ちをだらしなくさせた恋人の表情に、ザップは思わず吹き出してしまった。

「……………自分で選んで、買って、持ってきたくせに!」

「だって似合ってるから。……………なんでも着れるんだなお前」

「似合ってるつつうか……………。変態っぽいっしょ」

「馬鹿、それがいいんだ」

頭のとっぺんから、裸足のつま先まで。視線を何度も往復させ、側面に回ってうんうん頷いたりして、ステイブンはザップの女装を愉しんでいる。ザップは得意顔で、近距離での鑑賞会に根気よく付き合っていた。最初こそ照れくさかったりしたのだが、今となつてはもう慣れっこになっている。

「はー、いい。ノリのいい恋人って最高だな」

「そりやどうも。お役に立てたんなら良かったすわ」

こんな服を着ていても、男っぽいや雑な口調は変わらない。当たり前だが立姿もどう見たって立派な男子で、その彼がこういう服装をしているというギャップが妙な色気に繋がっていた。ステイブンはベッドに腰掛け直し、こくと喉を鳴らしてかのひとを見上げる。

「ねえ、下も見せてよ。自分でめくって？」

「もおー。ステイブンさんのエッチ……♡」

言葉だけ非難する風で、ちつともそんな顔はしていない。ザップは頬を赤らめ、にやあ、と口角を緩ませながら、ゆつくりとスカートの裾を持ち上げていった。

「あああああ……♡」

声を漏らしたのは、ステイブンの方だ。淫靡な幕がするする上がって、秘められていた場所が露になっていた。ザップは

いつものボクサーパンツではなくて、下着まで女性用のものを履いていた。もちろんそれもステイブンが用意したのでこうなることは分かっていたのだけれど、だからといって実際にすると単なる想像とではインパクトが比較にならない。レースやらフリルやら小さなリボンまでついた薄いピンクの布切れ、その下に押し込められた男性器が窮屈そうに、もっこりと生地を膨らませているさまがいやらしい。

「こんなちつこいパンツにナニ入れるの、大変だったんすからね？♡俺ちゃん、ビッグマグナムう……、ん、んっ♡」
「……あはは、はは……♡ そうだろうねえ、こんな暴れん坊じゃあねえ……っ♡」

まだ、触れてもいないのに。間近で見られているだけで、自分でスカートをめくって見せつけているだけで、ザップのペニスが勃起していくのがよく分かった。ぐぐ、と下着を歪ませて、じわじわ TENT を張っていく。ステイブンが面白がつてさらに顔を寄せると、とうとう薄桃色の布地がびんと張った。

「すごい……♡ えっちだ、ザップ♡ 僕に見られて興奮しちゃったんだねえ？♡」

「んあああ、あ……！♡ か、嗅がないで♡ そこ匂い嗅がないでえ……♡ ふあ、あ♡」

つるりとした布に鼻を当て、ステイブンが息を荒くする。嫌がっているような言い回しで、張り詰めた下着の頂には、じ

んわり染みが広がっていた。

「おツユが出るよ……♡ お股嗅がれてとろとろおツユが出ちゃってるよお前♡ ほんつとになんていうかもう、……やらしい……!♡」

「んんん、あつ♡ 言わない、でえ♡ おツユ出ちゃううううううう……っ♡」

ヤリチン屑ヒモチンピラ野郎、の面影はもはやまったくくない。お試し付き合いもそろそろ二か月が経とうかというところで、セックスの回数を重ねることに、どうも方向性がねじくれてしまったのだった。ザップが昂るポイントというのをステイブンは僅かも見逃さず、最初は視線で、次は淫らな言葉で、そのうえ卑猥なコスプレをさせて、と、プレイをどんどんエスカレートさせていき、今やそこらのポルノ・ムービーにだって引けをとらない有様である。

その辺はザップにだつて分かつちやいたのだが、キモチイイのにはどうにも勝てない。現にスカートは持ち上げられたまま、その頂上へ我慢汁の染みを作っている女物の下着を、これ見よがしに見せつけているのだ。

「すけべだなあ♡ んじゃ、いただきまーす……♡」

「ひうんっ♡」

ぴいん、と部分的に張ったことで空いてしまった下着の隙間から、ステイブンの舌を差し入れる。どうにか先端だけ布に

収まって、ほぼほぼ剥き出しになっている竿の側面を、ねつとりと味わうように舐め上げていった。

「はあ、あつ♡ あう、あ、やば、やばあ……っ♡」

「ふふ……♡」

根元から裏筋へ、ねろねろ舐め回されるとザップの腰がにわかにびくついた。まっすぐ立っていた膝が軽く折れ、屈伸の途中のような、不自然な体勢になる。両手だつて震えているのに、ザップはスカートの端を持ち上げたまま、ステイブンの愛撫を受け続けていた。

「イ……く、いっちゃうつ♡ ステイブンさ、もう俺……!♡」

♡ んあ、あつ!?♡ あああああつ、ぱつくんしちやだめえっ!♡ 出るっ出るっ出るっ出るっ!♡ ザーメン出っ、♡ んんんんんっ、んんんんん……っ……っ……っ!♡

「ふは……♡」

かぶんっ!♡とパンティ越しに亀頭を銜えられたのが決定打だった。言葉通りザップの尿道口から、びゅく!♡びゅるるるるっ!♡と、精液が勢いよく迸る。布一枚に隔てられていたとて、青臭い匂いがステイブンの唾内に広がった。

「イっちゃったな♡ 下着、汚しちゃったね……♡」

「んんう♡ だつてあんたが、あんんんん……っ!♡」

はあはあ息を乱すザップの耳元に口付けて、すぐさまスティーンは次の一手に移行した。いやらしく口角の片側だけを引き上げて、上衣の裾から覗く、薄ピンクの乳輪に舌を這わせる。乳頭には触れずに、わざとらしくくるうりと輪を描く。

「んあああああ……っ♡」

「つんつてなっちゃって、かーわいい……♡」

手を使わずに舌だけで刺激するので、ただの前戯にしてはアブノーマルな感が強い。開発され尽くして敏感になった尖りをあつさり放置して、今度は逆側の乳輪を舐め、しゃぶり、熱い息を吐きかける。

「んんんんん……っ♡」

ザップは身悶えているのに、力の入らない手で一生懸命になつてスカートをめくっている。それが主からの大切な命令であるかのように、どんなに理不尽な使命でもまっとうしようとする、哀れな奴隷であるかのように。

そしてそこになんともいえない悦が伴っていることは、再び雄々しく勃ち上がった彼のペニスがはつきり示していた。カウパーと精液とでぐつちより湿った異性用の下着を、張り詰めた陰茎が目一杯持ち上げている。

「またこんなにおつきさせちゃって♡ はしたない子はお仕置きだな♡ もっぺんいけよ、ザップ！♡」

「ふあっ！♡ あっ、あ！♡ そんなっ、急にいいいいいい

……っ！♡」

パンティの上からぎゅっと竿を握って、スティーンが手をスライドさせた。淫らな体液でぐちよぐちよになったそこは即席のオナホールとなり、ダイレクトな快感がザップを襲う。焦らされてばかりですっかり準備万端だった身体は、途端に体温を跳ね上げた。

「あっ！♡ あっ！♡ あっ！♡ あっ！♡ いやあっ♡ ちんちんっ、ちんちんがあああああ……っ！♡」

「やらしいおちんちんだな、ビクビクしちやつてる♡ これじゃあ即イキ間違いなしだな♡ 女性用の下着でシコシコシコ♡ えっちな汁が染み染みぬるのおパンツでシコシコシコ……♡ どうぞ見てー♡ つて自分でスカートをめくつちやつてるもんな♡ こんなで嫌あ♡ つて言われても説得力ゼロだよなあ！♡ ザップはちんちんシコシコが好きなんだもんな♡ 彼ピのおててでおツユぐじよぐじよパンツ越しにぬるぬるシコシコしてもらうのたまんないよなあ♡ すっかり変態……、だねえ♡ 女装シコシコ♡ えっちなセーラー服着てふりふりピンクの可愛いパンティでおちんちんシコシコしてもらってフル勃起なんだもんな♡ あーいくな、もうこれイくでしょ……♡ このおちんちんのふるふるは♡ イっちゃうときのふるふるだもんね♡ お前の性癖も、おちんちんのクセも……♡ みいんな僕にはバレちゃ

ってるから♡ だから安心して、すけべなとこ曝していきな
 さいね？♡ ね、ザップ♡ いつもみたいに、えっちなこと
 叫んで気持ち良くなりながらザーメンびゆるびゆるしていい
 んだよ♡ ほらもう持たないんだろう♡ ザーメン♡ 出
 そうよお♡ ねつとり濃ゆーいの……♡ 出して、ザップ！
 ♡ 女装シコシコザーメン♡ 自分でスカートぺろーんし
 ながらオナホバンテイにどびゅどびゅザーメン♡ 自分のお
 ツユでほどよくぬめった自家製オナホパンツにお漏らし射精
 ……♡ もう大人なのにパンツ汚しちゃう駄目さ加減にア
 ヘアへししながら白いのびゅっびゅしよ♡ ザーップ、ザーメ
 ン♡ 僕が見てる前でお漏らしして♡ お・漏・ら・し♡ 女
 装シコシコムルクをどびゅどびゅ♡ って恥ずかしお漏らし
 ♡ 女装シコシコがだあいすきな証のお漏らしザーメン♡
 いっぱい出そ？♡ どびゅどびゅしよ♡ 女装シコシコだ
 いちゅきザーメン……♡ 女おパンツにびゅっびゅだよ♡
 びゅ♡ びゅびゅ♡ びゅくるるるー……♡ って
 ♡ ほらイこ♡ イこイこ♡ ちーんちん♡ 女装シコシ
 コおちーんちん♡ どびゅどびゅしちやえよ、イっちゃい
 なよお♡ ほらほらちんちん気持ちいいね、気持ちいい……
 っ！♡ 自分のおツユで濡らした手作りのぐちよぐちよオナ
 ホおばんちゅで♡ イきなよザップ、すけべ汁発射して♡
 自主的にスカートぺろーんっしてて言ひ訳出来ない格好で

♡ イけよ♡ イけ♡ おちんちんの先から熱いのびゅくびゅくつてオナホパンツに出さない……っ！♡」

「あひい♡ はひ、あ、あっ！♡ やああ、やらし、やらしい……っ！♡ お、漏らし♡ お漏らし、しちゃっ♡ 女パ
ンツにいいいいいいいい……っ！♡ 女装シコシ
コ気持ちいい証拠の濃ゆういおツユっ！♡ 白いのっ、漏れ
ちやうつ！♡ 我慢できないっ！♡ お漏らし我慢できな
い……っ！♡ 漏れるっ♡ お漏らしっ♡
漏れちやうつ！♡ 漏らしますっ！♡ 女装シコシコで発
情ザーメンどっぴゅん♡って！♡ 出るっ♡ 出るっ♡
漏れちやううつ！♡ 女装シコシコだいちゅきちゅつきの
変態ミルクがっ！♡ 漏れっ、漏れりゅ、漏れひや、……！♡
あっ、あ、あああああああああ————
————っ！♡ んひい、
ひっ♡ ひいひいひいひいひい……っ！♡」

「おおお♡ 大量 大量……♡ いっぱいびゅっぴゅだね
ザップ♡ 変態♡ このド変態……っ♡」

「あっ、あん……♡ んっ、ん……っ！♡」

細腰を跳ねさせて、ザップが下着に射精する。ただでさえカ
ウパーでぐっしりだったのに二発目の精液まで加わって、ピ
ンクのパンティはぐちゃぐちゃのどろどろになってしまっ
た。

性器をしごく手を離れたステイブンに煽られて、ザップは怒るところか、唇を噛んで快感をこらえている。自らスカートをめくり股間を見せつけているにも関わらず恥ずかしそうに顔を背けているザップの様子は、ひどくちぐはぐであったし、異様に扇情的でもあった。

「はあーい気持ち良かったな……♡　じゃあ、見せてよ♡　お前がどれだけたくさんイったか、僕に分かるようによおく見せて……♡」

「~~~~~っ、ふ……♡　う……♡」

吐精の余韻にとろけた銀灰の瞳が、ステイブンを横目に捉えた。拒絶するでもなく、はしやぐでもなく、ザップはただただ恥じ入りながら、恋人の要望に応じていく。

曖昧な指示にも身体が動くのは、何度もこの味を覚えさせられたからだだった。彼の命令がなにを意味していて、それに従うとどんなに気持ちいいのか、ザップはすっかり仕込まれてしまっていた。

「あ、あ……♡　イっちゃい、ましたあ……♡　ザップは、こんなに……♡　出し、ちやい、まし……♡　た♡　チェック、してえ♡　ザップの、おパンツう……♡　射精したてのっ、ひらひら女パンツうううう……♡　っ！♡　チェックして、くら、さい♡　可愛いおばんちゅにべっとなりのっ、ザップの出したてすけべミルク♡　ねばこい大量の、変態汁っ♡　お

近くで、ご覧くだ、さあい……♡　もつともつと寄って近くで見えっ！♡　匂い嗅いで……♡　っ！♡　ラブリーなピンクのおパンティ汚しちゃったザップのっ、特濃お漏らしすけべ汁うううっ！♡　くんくんしてえくんくんしてええ♡　ステイブンさん、ステイブンさああああ……♡　っ！♡」

「……このすけべ♡　パンティに出したザーメン嗅げとか♡　まるつきり変態野郎だなお前はほんとに……♡　っ！♡」

「ふえうううううう……♡　っ♡」

ザップは震える手でパンティを脱いで、あろうことかくるりと裏返し、内側の面を一杯広げてステイブンの眼前へ構えていた。ザップの股間を覆っていた部分は諸々の体液が染み渡り、生地の色をあからさまに濃くしてしまっている。粘度の高い精液だけは染みきらずに付着し、薄い布地に乗っかるようになっていたので、ステイブンはその高めの鼻をぎりぎりまで寄せて、わざとらしく匂いを嗅いだ。

「ああ臭う、臭うなあ……♡　発情した女装大好きっ子のいやらしい匂いがするよ……♡　興奮してたんだな？♡　こんなにぶるぶるんの、いやらしいミルクがどびゅどびゅしちゃうくらいにさあ……♡　あー濃い、濃いよこのザー汁♡　見てごらんザップほら、ねっぱねば♡　どろんどろんだ、このおツユ♡　えっちな出たねえ♡　よっぱどお漏らし気持ち良かったんだね……♡　ほらあ見てごらん、こんなに濃

くって、とろんとろーん……♡ ねばこい糸引き♡ こつくり濃い味しそうだねえ♡ いい値段で売れちゃいそうなたっぷり糸引きミルクだねえええ……っ！♡」

「ああああああああ♡ あ、あ、やらしひ……っ♡ 意地悪言われ……っ♡ 出したばつかのザーメンぐちゅぐちゅ観察されながらひどいこと、言われ……っ！♡ あう、あう♡ これ、恥ずかしい……っ！♡ すご、めちやくちや、恥ずかしいよおおおお……っ！♡」

ザップが広げた股部分の生地の上で、ステイブンはぶるりとした白濁を弄び始めた。ねちよねちよぐちよぐちよ掻きまぜてから指先を持ち上げると、ねろん……♡と濃度の高い体液が糸を引く。ゆつくり不自然なまでに時間をかけて、ステイブンはザップの精液で戯れた。

「んー、卑猥だねえ……♡ 汚れちゃった女パンティの上で出したてはややとろとろおツユの粘度確かめてあげるのすっごくすけべでやらしいね♡ ほら、舐めて♡ 僕の手汚れちゃった、お前の変態汁のせいで……♡ キレイキレイにしてよ♡ 犬みたいに舐めなさい♡ 自分のすけべをお詫びしながらわんこみたいにぺろぺろ舐めて……♡ ほら、ほら、ほら♡ だってお前がいやらしくて淫乱で、こんな面白いもの出しちゃうから悪いんでしょう……？♡」

「んむうううう……っ♡ ん、め、ごめんなさ……っ♡

俺、おれ、すけべでええええええ……っ♡ ステイブンさんの指っ♡ 汚しちゃったのお……♡ ごめんなさい♡ 濃い汁出してえ、ごめんなさい……っ！♡ つわ、わんこみたいに、ぺろぺろするから……♡ 許して♡ 許してええええ……っ♡ ぺろぺろしますねえ、ほらぺろぺろお♡ ぺろぺろおおおおおお……っ！♡」

差し出された指を、膝立ちになったザップが必死に舐める。指先から根元まで舌を這わせて、丁寧に奉仕する。ステイブンが勝手に始めたことだったの的外れな謝罪を連ねて、ずいと突き出された二本の指に、ザップはぱつくりしやぶりついた。下品な形に口元を歪め、祭りの面のひよつとこのようになりながら、上目遣いに主人を見つめる。その間も、唇と唾内と舌とで吸いついて、ちゅう♡ちゅう♡ぢゅっ♡ぢゅ♡と愛撫するのを忘れない。

「はは、みーつともない顔♡ ひよつとこフェラしても可愛いなんてお前♡ 反則だよなあ！♡ おいすけべ♡ 僕のペニスのこと考えながらしやぶってんのか？♡ お前的大好きな太くてかったいのこと想像しながらしやぶしやぶご奉仕してんだろ♡ すっかり雌の顔しちやって♡ ちんぽ♡ちんぽ♡って思ってるの、顔に出ちやってるぞド淫乱♡なにが夜の帝王だよブサ可愛いおフェラ顔曝しちやってさあ♡ 一生懸命吸いついちゃってお前はほんとにいやらしいち

んぼ狂いだよ♡ ちんぼ狂いちやーん♡ おちんぼだいちゆきちゃん♡ おちんぼ舐め舐め想像して、ハメハメされるの期待しちゃうんだよな元ヤリチンボーイちゃん!♡ 今じや立派なビッチだなあ♡ あは、またそんなおっ勃てて……♡ ほんとと変態だよなお前ってさ……♡ すっごいカッコでフェラ顔に意地悪言われて♡ そんな感じて、ペニスおつきくさせちやってるんだからさあ……っ!♡」

「んふううううううう、うううううう……っ!♡」

ステイブンの指摘通りで、ザップは再度勃起してしまっていた。下着の布地を広げるために両手が塞がっているものの、振り返った陰茎が勝手に、するするスカートをめくり上げていく。清楚なブリーツの隙間から先端が顔を出していたかと思えばとうとうによりと、竿全体を露出してしまった。

「あーあ、フル勃起しちゃったか♡ スカートの股からお前の立派なおちんちんがによつきり生えちやってるのえっちだね♡ じゃあ今度はお掃除こっちな?♡ パンツも綺麗に舐めなさい♡ 自分が出したもののなんだから、しつかり舐めて片付けなさい……♡」

「ひあう……♡」

ちゅぽん♡、とわざと音を立て、ステイブンがザップの口から指を抜く。続く命令を耳にしたザップは恥ずかしそうな切なそうな、それでいて気持ち良さそうな表情で目を細めた。そ

ろそろと舌を伸ばし、薄桃色のパンティの生地へと、ゆっくり顔を近づけていく。

「……っん、♡」

「全部舐めるんだよ♡ それ全部舐めて綺麗にするんだ♡ どんな味がするか感想言いながら舐めて♡ ザップ、お前のザーメンどんなお味をするの?♡ こっち見て、ほら♡ 自分のザーメンレビューして♡ 女パンツにぴゅっぴゅしたばっかの新鮮ミルク♡ 美味しいのかな?♡ どうかなあ♡ すけべなお汁の品評会だよ♡ さあさあ聞かせて♡ 自家製おばんちゅオナホで女装イキしたザップ・レンフロちゃんの、今日のおツユはどんな味かな……っ?♡」

「んんんん、ん……っ!♡」

掲げた下着を俯いて舐めれば、少しは視線を避けることができるのに。ザップはそうせずに息を弾ませ、あえてステイブンを見上げていた。ちろりと差し出した舌に精液を乗せ、少しづつ飲みこんでいく。頬を染め、溶けきった声で、馬鹿馬鹿しい命令を忠実にこなしていく。

「あ、あう、濃ゆい、ですううう……♡ すっごく濃いいいいいいいい……っ♡ 俺、の、お漏らし♡ お漏らしザーメン♡ 興奮してたからっ、こつくり特濃で出ちやいましたああああ……♡ 女装シコシコだいちゅき汁♡ 舐めてるとこお、パンツ舐めさせられてるとこ、見られ

ちやつてえ……っ！♡ んっ、ん！♡ きも、気持ちいい♡
 これえ、やらしくって♡ きもち……っ！♡ おパンツっ！
 ♡ 舐めさせられてるのおおおとおお……っ！♡
 カウパー染み染みのオナホばんちゅっ♡ ぺろぺろさせられてえ……っ！♡ あう、あう！♡ すごいえっち、えっちな気分になっちゃ……っ♡ んう、んん♡ んんんん、んー
 ……………っ！♡

遠慮がちにぺろぺろ舐めていた動きはだんだん大胆になっていく。露骨な仕草で舐め上げたり、終いには生地にしゃぶりついて、ちゅー……っ♡と音を立てて吸いつくまでになっていた。

「あっははははは！♡ オナホおばんちゅ美味しいか？
 ♡ そんなにおばんちゅ好きなら、そのまま可愛がつてやるよ♡ こっちおいで、それ口に入れたまんまこっちに來なさい変態ちゃん……！♡」

「んうううう……っ♡」

ステイブンはベッドに寝転んで、下着を銜えたザップを自分の顔の上へと導いた。背面顔面騎乗の体位をとって、無防備な肛門に舌で触れる。

「んううう…………………っ！♡」

「あはあ……♡ やーらし♡」

ステイブンはぺろんとスカートの後ろ側をめくってやつ

て、ひくつく肉穴と戯れ始めた。舌で皺の一本一本をなぞり、窄まりの中央を尖らせた先端でつつく。焦らして焦らして、ザップの腰がひとりでに揺れ出すのを待ってから唇全体でディープキスを交わす。

「んー……………っ！♡ んー……………っ！♡
 ……………♡ んんんんんんんん……っ！♡」

びくびく身体を震わせて反応するのに、嬌声はぐもつたままだ。未だに大人しくパンティを銜えている恋人の、その性癖のこじれ具合の深さを思い、ステイブンは小さく笑った。

「……ふ、う！♡ ひう……んっ！♡ んんんんんんう、
 んんんんんんんん………っ！♡ ん、ん、い、ふ………！
 ……………♡ イふううううう………っ！♡ んう、ん！♡」

ステイブンからは見えないものの、ザップは下着を口に食んだまま、とろんと恍惚のまなざしで宙へ視線を彷徨わせている。息は乱れて肩が上下し、唇からだらだと筋になって涎が垂れた。そうして絶頂の予感に全身を緊張させたとき、絶妙なタイミングで、ペニスを掴まれ射精を堰き止められてしまったのだった。紺色のスカートごと思いきり握られた竿が、行き場を求めるみたいにびくん！♡びくん！♡と大きく脈打つ。

「んふうううううううううう………」

くくくっ！♡ ひう、ひ……っ！♡ ひiiiiiiii……っ！♡
♡ にやにこれえ♡ ひどいつ、ひろiiiiiiii……っ！♡
「ははっ、可愛い……♡」

絶頂を無理やり止めたくせに、アナルへの愛撫はちつともやまない。ステイブンはそこへ唇を当てたままでザップの乱れつぷりをからかい、すぐさまれろ♡れろ♡ちゅば♡ちゅば♡と水音を立てて口づける。

「ひやめ……っ！♡ あひいっ！♡ イ、きは……っ！♡
イか、せ、んんんううううううう……っ！♡ ひやあ、いや、あ、あ、んあああああ……くく……っ！♡」

「だーめ♡」
「そんな、あ、ああ……っ！♡ んふあ、あ……っ！♡」
ちゅ♡ちゅ♡ちゅ♡ちゅ♡ちゅ♡ちゅ♡ちゅ♡と肛門を吸われ、ぬらつく舌でぬぶん……っ！♡と内部を貫かれる。執拗な責めに変化があるたびに、ザップは顎を反らせて果てそうになる。

尻穴を舐められだしたこの短時間に、邪魔さなければもう何度精を放っていたらうか。けれども、現実には一度もイかせてもらえていなかった。気が狂いそうな熱が、全身で暴れ回っている。

「いやら……っ！♡ イか、せ♡ イかせへえっ！♡ ステ

イブンひゃんっ！♡ イかせへくらはあああああああ……っ！♡ んう、う、うう、うううううう……っ！♡ あっ♡ あ、あ……っ！♡」

結果的に自分を苦しめることになる、分らないわけではないのに。渦巻く衝動をこらえきれず、ザップはめちやくちやに腰を振り始めていた。ステイブンの顔面の凹凸に臀部を擦りつけて、自慰によく似た快楽を得る。

それでもイかせてもらえずに、彼の驚鼻の先や、こつちもどうぞと提供された舌べろへアナルを押しつけ、ねだるみたいにピストンをした。唾液にまみれた肛門は、ぴちよ♡ぴちや♡くちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅん……っ！♡と、いかにもいやらしい音を立てて愚行をいつそう際立たせている。

「ん、はは♡ だーいぶ、出来上がってきたね……♡」
「んああああ……っ！♡」
陰茎を握っているのと逆の手で、ステイブンがザップの後孔をぐに……♡と開いてみせた。若干の抵抗はあってもそこはとろとろに潤み、桃色の肉を震わせて、明らかに雄を誘っている。

「じゃあ仕上げ、ね♡ こつからは自分で出来るよね？♡」
「！♡」

ステイブンはザップを解放すると、立ち上がって想い人を見下ろした。意味ありげな赤銅色の双眸に、ザップはぐくりと

喉を鳴らす。これまで幾度も、こんな夜を過ごしてきたのだから。言葉はなくても、なにが求められているのかよく分かっていた。

「……………、っ……………！♡」

ザップは羞恥に頬を染めて、わななきながらベッドに四つん這いになって伏せる。しっこく銜えていた下着を、ここでもうやく口から離れた。そうしてステイブンへと向けていた尻をのろのろ持ち上げていき、最後に自らスカートをぺろつとめくって、排泄のための場所をかのひとへ曝け出す。

「お、ねが……………♡も、……………してえ……………っ！♡」

「んー？♡」

屈辱的なポーズで露骨に哀願して、なのに褒美は与えられない。それどころかステイブンは、にやにや口角を上げてザップの尻を撫でただけだった。

「僕、そういう風に教えたっけ……………？♡」

「はうん……………っ！♡」

ステイブンの声の艶が増す。もちろんわざとだ。ザップがそれに弱いと知っていて、狙ってやっているのだった。

ザップの被虐癖をすっかり暴いてくれやがった張本人は、とさおりこうして意地悪をしてくるのだ。お前はこういうのが好

きなんだろ、という態度で、実際それが外れていることなどないから余計にたちが悪い。ここからの悦を思えば、断ることなんて決してできなかった。苛められて、辱められて、それなのに、それだからこそ——、ひどく、ひどく、興奮する。

「お、……………♡　　ゝゝゝゝゝゝ、♡　あ、の、おま、……………おっ、……………ゝゝゝゝゝゝおまん、こ……………っ♡　えっちなザップに、……………おまんこお……………っ♡　してくださいあい、ステイブン、さあん……………っ！♡」

恥ずかしさに全身の毛穴という毛穴が開き、ぶわ、と一気に汗が出る。

自分の発言のおかしさぐらい、本人にもちゃんと分かっている。ザップは紛れもなく男だ。口にしたのは女性器の俗称で、こんなやり方で動詞代わりに使うものでもない。

けれどステイブンは、ザップにこうやってねだらせるのを好むらしかった。こんな言い回し愛人にだつてさせたことはいが、機嫌をとらないといつまでだつてイかせてもらえないのは身をもつて経験済みだった。だからしょうがない。女みたいな恰好をさせられて、女でも言わないような卑猥なおねだりを

させられて。しょうがないで済ませるには悲惨すぎるはずなのだけれど、これで感じてしまう性分なのだと、ザップはもはや自分でも認めてしまっていた。

「なあに？♡ 声ちっちゃいなー♡ 聞こえない、聞こえない……♡」

「んああああああ……っ！♡ も、もお、ステイブンさん……っ！♡ お……、おまんこしてえっ♡ ザップに♡ おまんこおおっ！♡ おまんこっ！♡ おまんこおおおおおおお……っ！♡」

「はははっ♡ そんなにおまんこして欲しい？♡ 何でもする？♡」

「うん、うん……っ！♡」

なりふり構えなくなってしまったところにするつと入り込んでくるから、この男は恐ろしい。致命的にやらかしてしまつたようやくザップが気付いたのは、パシヤン、という無機質な音が背後から聞こえてきてからのことだった。

「……っ、ステイ、ブン、さ……っ！♡」

「あつはつは、カメラ映えるなあーお前のここ♡ ピンクで♡ 可愛い♡ ザップの、お・ま・ん・こ……っ！♡」

「ひええええ……っ！♡」

パシヤン。カシヤン。カシヤ。連続するシャッター音に動揺しながらザップが振り向くと、やはり。しゃがみ込んだステイ

ーブンがスマホを構え、あらぬところの撮影会を強行していた。いざその姿を目にしてもとても信じられそうにないのだが、他人にぐにいと菊門を開かされる感覚が、これは現実だとザップに思い知らせてくれる。

「なに!?♡ なんてっ!?♡ ステイブンさ、なにしてんの……っ!?♡ なん、で、俺の……っ！♡ ケツ穴あああああっ！♡ やめてっ、やめ……っ！♡」

「何でもするっとお前が言っただろ♡ 男に二言はないよなあ、な、ザーツ……っ！♡」

「んう、でも、だつて……っ！♡」

こんなときだけ都合よく男扱いして、やつてることは下手なボルノよりえぐい。会話の間にもカシヤカシヤパシヤパシヤ、容赦なく撮影完了の合図が鳴り続けている。

ステイブンは親指と人差し指とで肛門を無理に伸ばし、縦に、横にと歪んだ窄まりを次々写真に収めた。ついにはフラッシュまで焚きだして、そのうえザップの臀部に体液まみれになったパンティを広げて乗せ、できあがった淫らな絵図を至近距離で、好き勝手に記録していく。

「ううう……っ！♡ いやああああ、やあああ……っ！♡」

「嘘は良くないな、嘘は♡ ほら分かるだろ、お前のココ……」

♡ 撮影してもらって大喜びしてるじゃないか♡ ぐねぐね俺の指に絡みついちゃってやーらしい……♡ ほれほれ

♡ ほじってあげよう、ほーじほーじ♡ ほじほじ♡ ほじ
ほじ♡ ザップのおまんこほじほじほじ……♡」

「ひああああああああああああ……っ！♡」

太い指が悪戯を始めると、ザップは甲高い悲鳴を上げた。何本もの異物が肛門から胎内に潜り込み、ぐに♡ぐに♡ぐに♡ぐに♡と小さな入り口を変形させる。奥まで差し込んでゆっくり手を引かれると、食欲な肉穴のふちがめくれ上がった。それから挿入したまま指を広げられ、蠕動する肉壁をくばあ……♡と露にされてしまう。

「あ、あ！♡ ナカ、ナカあ、撮られて……っ！♡」

「うん♡ ザップのピンクいおまんまん、画面いっぱいにはつちり撮れてるよ♡ これ俺の携帯の待ち受け画像にしてやるっかあ♡ 誰かに見られたら困っちゃうねえ♡ おまんこの中のえつちなお肉なんて♡ 気安く他人に見せるもんじやないのにねえ……♡ しかもチョコレート色の可愛いおしりも映ってるから、それこそ誰が被写体なのかって知り合い連中にはすーぐバレちゃうかも♡ そうなっちゃうたらどうするう？♡ ねえザップ！♡ お前がおまんこの中で写真に撮られてさっ♡ 彼にそれ待ち受けにされて悦んじやうような変態さんだって皆に思われちゃったらどうしよっかーあ……!!♡」

「ひああああん……っ！♡ あああ、やめてえええええ

……！♡ 超接写おつぷろげおまんこ♡ 待ち受けなん
てっ、そんな、そんなあ……っ！♡」

まったくあり得ないことだが、混乱と動揺で頭がパニックっているせいで、妙に生々しくその場面を想像してしまった。

お宝映像だと言わんばかりの自慢げな素振りでスマートフォンを差し出し、ステイプンがライブラの面々に、ザップのアナルの写真を見せびらかしている。縦、横、斜めとやりたい放題引っ張られて伸ばされてしまったどアップの尻穴が衆目に曝され、またその画像の大量つぷりに、男性陣だけでなく女性陣からも、変なテンションにはしゃいだ笑い声が響いた。

なぜだか、そんなことをしたステイプンへの批判は一切発せせず、被写体になってしまったザップに対してのみ、「スキモノですっねえ」とか、「こんな淫乱猿だなんて知らなかった」とか、「私にもデータちょうだいよ。拡散するから♡」などと、下衆なりアクションが延々続く。そしてみな、男も女も、にやにやと好奇の目でザップの身体を舐め回すように見てくるのだ。

「ひ……っ♡」

ちゃんと服を着ているというのに、彼らの視線だけで、全部の衣服を剥がれているみたいに感じてしまう。それだけでは済まずに、会話の流れによってとうとう本当に脱がされることになってしまった。

「ねえ私たちにもホンモノ見せてよ！ この写真がフェイクじゃないか確かめてあげる♡」

「や、や……っ！♡ やめてくださいってそんな……！ ちよつと、ちよつと待って、ストップ、ストップ——！」

いやだと言っているのに何本も見知った手が伸びてきて、ザップの服を引き裂き剥ぎ取り、無理やり床に押さえつけて尻肉を割り開く。丸出しになってしまった肛門を指差して笑い、何枚も何十枚も写真を撮る。やめてやめてと騒いだところで、加虐者たちの標的になってしまった秘所を守るすべはない。

彼らはザップのアナルをつついてほじって大きく開かせ、その奥の匂いを嗅ぐような仕草でスマイルを決め、ピースサインで記念撮影をする。そのうえその辺にあった文房具やら、ティータム用のマドラー、活けてあった花や、清掃に使うほうきの柄まで突っ込みだして、節操なくあれこれ飛び出させている尻穴の哀れさを笑ってはしゃいで映像に残して——。

「ひぐううううううううんんん……っ！♡」

なんでそんなことまで妄想してしまったのか、本人にすら分からない。そんな扱いを受けることを望んでなどいないはずなのに。ただどうしようもなく気持ち良くて、ザップのペニスバキバキに反り返り、とろとろ涎を零している。鳴り止まな

いシャッターの音に鼓膜まで犯されて、「あ、もうイクっ！♡」と叫んだ瞬間に。ちゅるりと、ザップのアナルを弄んでいた指がいつぺんに抜けていった。

「あ、あ、ウソおとおお……っ♡」

完全に空振ってしまい、思わず未練がましい台詞が漏れる。そんなザップにはお構いなしのステイブンの手元から、ポォン、と今までと異なる電子音が鳴った。

「はいザップ、次動画な♡ 今度は声も入るからね、いっぱいすけべなこと言っていきまろ♡ 『おまんこ犯して♡』

っおっきな声でおねだりしながら、一文字ずつお尻の穴きゅつきゅしてハメて欲しいアピールをしてください♡ ザップ♡ 下のおクチきゅつきゅで可愛くおねだり♡ おまんこ使って恥づかしいおねだり動画撮ろ♡ これが出来たらもつと気持ち良くてあげるから、ね♡ おまんこピクピクのお下品おねだりムービー撮ろ♡ 撮ろっ♡ さあ、早く……っ！♡」

「ひいひいひい……っ！♡」

逆らうこともできたらうに、そんな選択肢は見当たらなくなっていた。イきたくてもいけない苦しみから逃れたくて、それにもつと気持ち良くなりたくて、ザップはもじもじ膝を擦り合わせる。ふー♡ふー♡と熱い息を何度か吐き、尻穴の皺という皺に降り注ぐ視線を感じながら、ひくんとそこを動かした。

ステイブンのそれ、機械のそれ、また、先ほどの妄想が尾を引いてライブラの皆に注目されているような気になりつつ、排便の要領で肛門に力を入れる。

「あ、ふぁ……っ♡ お……♡ お・ま・ん・こ……♡ おかし・て……っ♡ こ、こ……っ♡ おかして、くらさい……っ♡ あう、あう、あう……っ♡」

「そうそうその調子い！♡ もつとおつきな声で♡ 頑張っておねだりして？♡ ザップのどこを？♡ どうして欲しいの？♡ ほらファイト、ファイト！♡」

「ううううううう……っ♡」

撮られていると分かっているが、カメラに向けて、不浄の穴を収縮させている。頬を焼く鮮烈な羞恥に耐えて愚行に及んでいるのに、もつとやれと囁し立てられている。あまりのことに内股が震えていても、慈悲など与えられはしない。蜷の行き届いた愛玩犬は、くうんと小さく鼻を鳴らして下劣な命に従った。

「ここ、です、ザップの……っ、おまんこおとおおとおおとおおとおおとおお……っ♡ ばっちりステイブンさんに動画撮られちゃってるっ、かあいそーな、穴……っ♡ ここ、が……♡ おまんこ、ですうううううううううううっ！♡ ザップの、おまんこおとおおとおお……っ♡ いっしょけんめヒクつかせる、からっ♡ つお、か……して

っ！♡ お・か・し・て……っ！♡ お・ま・ん・こ……っ♡ こおお！♡ 早くう、早くうううううう……っ！♡ おおとおおつ、ほおおとおおとおお……っ！♡」

「あはーあ♡ ピクピクおまんこえっちだねえ♡」

「ふえううう……っ！♡」

言うことを聞いて道化を演じてやったのに、肝心のステイブンは上機嫌で尻穴鑑賞を決め込んでいる。そうじゃなくて、と焦る気持ちだが、ザップをさらに過激な方向へと暴走させた。「ち……が……！♡ ちが、そんな、見てないで……っ！♡ ハメてよおとおおとおおとおおっ！♡ ハメて、イかせて……っ！♡ 言ってるでしょお!?♡ お願いつ！♡ おまんこおっ！♡ 犯してえっ！♡ おまんこっ！♡ ステイブンさああんっ！♡ ねええ、お願いっ！♡ おまんこ犯してええっ！♡ ザップのおまんこ犯してよおお♡ 願いつ、お願いっ、お願いいいいいいい……っ！♡」

「わーお♡」

ぷり♡ぷり♡ぷり♡と、引き締まった小尻が左右に振られている。小さな子供がやるのであればまだ可愛げもあっただろうが、過激な女装をした成人済み男性がやっているのだから倒錯感が凄まじい。

「かーわいっ♡ ザップはおまんこ犯してイかせて欲しくっつて、ケツ振り動画まで撮らせちゃうんだあ♡ そんなにお尻

ふりふり振っちゃって、よっぽどハメられたんだなあって思われちゃうよ♡ 自主的にケツ振りまでして♡ みつともなー♡ 恥ずかしいの♡ ああいやそっか、ザップは恥ずかしいとイインだっけ……♡ じゃあ尻文字でも書いてみるよ♡ おまんこ丸出しのお尻振って芸して、ザップ!♡

「ああああああ……♡ は、い、ふあい♡ みつともなく、尻文字……♡ おまんこ丸出しのお尻振って♡ 芸しますううううう……♡ カメラの前で♡ 尻振り芸♡ 恥ずかしいこと、します、からああああ……♡ あん♡ あん♡ ああああん……♡」

「……っは、ははははは!♡ すごい!♡ ゲスい!♡ もーザップう、お前って奴は……!♡」

ぎりぎりまで尻を高く持ち上げ、ザップが必死に腰を振る。繰り返して空中になにかを描いて、それが大きなハートマークだと気付いたステイブンは膝を叩いて爆笑した。笑い声につられていきそうになっている芸達者な犬へ、ステイブンは新たに下品な悪ふざけを仕掛ける。

「あつなにい……♡ なに入れたの、今あああああ……♡」

「何って、お前の使用済み女おパンツ♡ これ入れてお尻尾みたいになったまんまおケツふりふりしてよすけべなワンちゃん♡ あつちこつちにおつきくケツ振って、雌犬っぷり発

揮して♡ はい、いっちに、いっちに……♡」

「はひいん……!♡」

ステイブンの話す通りで、ザップの尻穴には、もろもろの体液にまみれた例の下着の端っこが突っ込まれていた。それが果たして犬の尾っぽに見えるのかどうなのか、というか、そもそもこの意味不明なブレイはいったいなんなのか。疑問もなくはなかったが、すでに興奮しきって酩酊状態のザップに抗うすべなどものはや存在しなかった。掠れ声で喘ぎながら、自分の意思で、大きく尻を横に振る。

「あ、あつ……!♡ メス犬、ですううううう……♡

っ!♡ ザップは、メス犬う……♡ 恥知らずのメス犬、ですからああああああ……♡ っ!♡ メス汁染み染みのおぼんちゅ尻尾フリフリしてえっちな芸♡ しますからあああ……♡ もおおねがつ、犯してえ♡ 犯してえっ!♡ まんこハメて♡ お願いまひゅ、わんわん、わん♡ ハメてえハメてえまんこハメてっ!♡ お願いでひゅからあ♡ パコられたいのおっ!♡ わんわんわんっ、わんわんわああああああんんん……♡」

右に左に、大げさなモーションで臀部を突き出して、いかにも下品な尻振り芸が披露される。痴態をすべて撮影されているのだと思えば思うほど昂ってしまい、ザップはとうとう犬の鳴き真似までしていた。今度は尻を縦に振るので、ぱた♡ぱ

た♡ばた♡ばた♡とピンクのパンティが揺れ、ザップの股に何度も叩きつけられている。

「はっは♡ そっかそっか、わんわんわんだな！♡ お前、雌犬なんだもんなあ♡ いい声で鳴くねえ♡ 可愛い可愛いつ♡ ちゃあんと全部、撮ってるからなー♡」

「んおっ、お……っ！♡ 褒められ、っ♡ しゅづ、これ、気持ちイイ……っ！♡ やらしいの褒められちゃったら♡ すっごいすっごいきぼちいい、よおおおおおおお……っ！♡」

叫ぶなり、ザップは両手を尻へと向けた。褐色の肌に指がめり込むぐらいの強さでぎゅむうううう……っ♡と肉を掴めば真横に肛門が開いて、銜え込んでいた下着をぼとんとシーツの上に落とす。無様な尻振りはやんだものの、今度はカメラの前で、淫らな桃肉が主役のショータイムが始まっていた。

「おっ、いい眺め……♡ そっかあ、お尻振るだけじゃ足んなくなっちゃったかあ……♡ じゃ、ケツまんこ奥まで撮られながらラストスパート頑張ろっか♡ これで最後の仕上げにしようね♡ ここからは、ライブラの皆にこのムービー見てもらおうつもりで……♡ 思いつきえつちな気持ちになって、おまんこぐっぱあ撮影会しよ♡ 皆に分かるように自己紹介して、お名前だっておっきな声で連呼して……♡ そんなでおまんこぐっぱあだよ♡ ドキドキするね♡ 気持ちいいね

っ♡ ああほんと、淫乱なお前にびったりの♡ 最高のシチュエーションだねえ……っ！♡」

「……ひっ、ううう……！♡」
ひどいことを言われているのに。彼の指摘が的外れでないことは、ザップ自身が一番よく分かっていた。くはあ……♡と開いた尻穴が空気に触れてすうすうするのを知覚したなら、雌犬のペニスははいよいよそり立ち、じわんと蜜を滴らせる。感じているのだ。自ら尻を挿んでアナルを、内側の肉までも曝しそこを映像に残させている、そんな状況で己は、途方もない悦を食っている。

浅ましさが恥ずかしくて、身体が燃えそうなくらいに心地良い。媚びの滲んだ上ずった声で、ザップは淫らに言葉を紡いだ。

「あ、あ……♡ みんなあ……っ♡ お、れ、ザップ……♡ ザップ・レンフロ、ですううううう……っ♡ 今、俺……♡
♡ おっ、おちんぼ、欲しくて……っ！♡ 全裸で、尻文字書かされたりしながら……♡ 動画っ、撮られているのとおおおおおおおおお……♡ 皆に見てもらおう動画っ、撮られてるうううう……♡ レオにも、魚にも……っ！♡ 旦那にも、姐さんにも、チェインにも見られちゃうって分かりながらあつ！♡ おちんぼ欲しさにおまんこぐっぱあしていますっ！♡ おまんこぐっぱあつ！♡ 奥まで見てえええ♡ うんこ出すだけじゃなくってちんぼ入れる穴に

なっっちゃった俺の……っ、おまんこおおおおお！
 おまんこおおおおお！
 おまんこ見てええええっ、ぐばあああああああああ
 ……………っ！
 何回もハメられてっ、すっかりちんぽの味覚えちやっただ俺のすけべ
 穴ああ♡ どおぞっ♡ ぱかあつてすりゅからあ♡ 奥ま
 で見てっ！♡ ここにっ♡ ちんぽハメるのおおおお
 おっ！♡ いっぱいハメられたのおおおお！
 おお……っ！♡ ぶっとい雄ちんぽのハメ心地忘れらな
 くなっっちゃった俺のエロまんこ♡ くばあするから奥まで見
 てえっ！♡ くばあ♡ ここにいい……っ♡ おちんぽ欲
 しいよわんわんわんっ♡ 犯して欲しいのっ、わんわんわあ
 あん……！♡ 俺の♡ ザップのお、くばまんこ！♡ お願
 い♡ ハメてえ♡ もつと見てえ♡ カメラの前で自分で
 ぐっばあしちやってるザップのこーもん、お尻の穴あ！♡
 おまんこですう、ここおまんこになっっちゃったのお♡ ステ
 イブンのきょーあくデカ太おちんぽしやまにおまんこ
 にされちやっただのおおおおっ！♡ おまんこ見てえ、わん
 わん……っ！♡ 奥までジロジロ眺めてハメてえええっ！
 ♡ いっぱいパコつてっ！♡ わんわん、わ……んひいい
 いいいいいいいいおちんぽきたあああああああ
 ああああああ………っ！♡

「っは、挿入ただけでイきやがったこの雌……っ！♡」
 予告なしに肉棒を根元まで突き入れてやると、ザップは絶叫
 して果てた。強烈な締めつけにいやらしい笑みを浮かべながら、
 ステイブンは愛しの肉体を蹂躪し、鋭く小刻みに貫いてやる。
 赤い入れ墨が映えた下腹と褐色の尻肉とが激しくぶつかり合
 い、ばん！♡ばん！♡ばん！♡と生々しい音を連
 続して立てた。

「あっあっ！♡ あ……………っ！♡
 おちんぽおおおっ！♡ ちん、ぽおおおお……っ！♡」
 「くくっ、まだイってる……♡ えっただねえ？♡ よっ
 ……と♡」

「ひあう……っ！♡」

ステイブンは繋がったまま強引に、後背位から正常位へと
 体勢を変える。衝撃に喘いだザップに構わず彼の両足を掴み、
 無理やりぐいと身を折り畳ませた。

「ふふ、アへ顔よく見えるう……♡ じゃあはい、自分でこれ
 持つて♡」

「あ………♡ あ、やだ、やだ、こんな……っ♡」

押しつけられた勢いに負けてV字開脚ポーズになっしま
 ったザップが足を手離そうとすると、暗赤色の瞳がぎろり、と
 威圧する。俺の言うことが聞けないのか、という強い強い視線
 に屈し、ザップは情けなく唇を歪めた。

大人しく自分の足を下品な角度に固定し続ける態度に満足して、ステイブンは荒っぽく腰を使い始める。どうぞお使いください♡と言わんばかりに無防備なザップの疑似性器へと、無遠慮に雄を突き立てていく。

「ふ、ふ♡ いい顔だ……♡ たままないよザップ♡ 待望のおちんぼしやまで蕩かされちゃってるお前のお顔♡ ザ・雌犬って感じ♡ 自主的V字開脚でノーガードおまんこずっぽんずっぽんされちゃってるアへ顔♡ きっちり撮ってるんだからなザップ♡ こゝまでされて雌ちんこバッキバキにしてお前の糞みたいな性癖♡ 撮られてるぞ♡ 一突きごとにカウパー垂らしやがってこのド変態野郎がつ♡ エロいセーラー服姿で人間オナホになってちんちんぶるぶる揺らしてアへってるぞ♡ 撮られてるぞ♡ おらこつち向け♡ 『犯してもらって嬉しいでーす♡』ってカメラ目線でにつこり笑え……♡ 醜態曝せ♡ 誰にも見せられないような痴態曝して、全部全部撮られちまえザップ♡ この淫乱♡ 変態♡ 糞性癖のド畜生マゾ犬め……♡ お望み通りぶち込んでやるさ♡ さあ気の済むまで……、喘げ♡ アへれ♡ 泣き喚けえええええ……♡」

「はあ、はあ……♡ あん♡ あん♡ ああん……♡ いやあつ、これいやあああああ……♡ ちんち

ん♡ ちんちんが♡ おまんこだけじゃなくってちんちんまで苛められ……♡ はふうううう♡ やめて、撮ら、撮らないで、恥ずかしい♡ 恥ずかしいからああああああああ……♡ あつあつ♡ イ、ぐ♡ イ……つぐうううううううううううううううううう……♡」

ステイブンがわざと突き上げるので、半分勃起したザップの男性器がびよん♡びよこ♡びよこん♡と可愛らしく下腹で跳ねる。惨めなダンスをお披露目しているかのような陰茎はみるみる硬度を増し、弾むたびに先端から、澄んだ雫をあちこち散らした。

ステイブンに尻穴を犯され、なおかつ意地悪くからかわれて完勃ちしてしまった竿は哀れなまでに弾力を持ち、力強いピストンに伴って振り子のようになっていた。大きく揺れてはびしゃん♡とみつともなく自らの肌を打ち、下劣な絵図と淫らな打音との共演が止まらない。ぶるん♡ぶるん♡びしやん♡♡べちん♡♡ぶるん♡♡びたん♡♡と繰り返して竿を痛めつけられたのち、ザップは半身を反らせて射精させられてしまっていた。

「あああああ……♡ へああああああ……♡」

びゅくるるるるる♡びゅくるるるる……♡

「ほんつといやらしいなあお前……♡ もつとえつちにしてやろうか？♡」

言うなりステイブンは、ザップの顔面にずぼつ！と例の下着を被せたのだった。目元と鼻から下こそ露出しているものの、股間の部分を上にして女性もののパンティを被された姿はまさにアブノーマルの極みだ。自分がどんなことになっているか直接見せられたわけではないにしろ、その悲惨さを想像するのは容易いことだった。しかし容赦なく見つめてくる機械の視線と目が合つてしまい、ザップは「あう……♡」と小さく声を漏らす。

「おいおい、また勃起始めてるぞ……♡ つたくこのすけべ
わんこが♡」

「うあ、あ！♡~~~~~つ！」♡

あれだけイったあとなのに性懲りもなく勃ち上がりだした
ザップのペニスを、ステイプンが片手でぎゅっと掴む。遠慮
なしにがしがしごいて、あつという間に高めていった。

「はは、すーぐガチガチにしちやつてチヨロいなあ♡えつ

ちなコスして、M字開脚でハメられて♡　そんでぐぢよぐぢよの女パンツ頭に被ってフル勃起か♡　それって完全に♡　変態だよな！♡　好き放題されちゃってビンビンにナニおっ勃てて……っ！♡　いかにもマゾ犬性奴隷って感じだよ♡　ザップ！♡　ほら呼んでごらん♡　ご主人様あつて♡　私はあなたの性奴隷ですう♡つてアへ声で♡　っははは、ほらほらもうイきたいんだろ！♡　おちんちんびつくんびつくんしてるじゃないかこの駄犬っ♡　おパンツ被りがよくお似合いの雌わんちゃん♡　ほら、ほら！♡　雌の声出して媚びてみるってんだよお……っ！♡」

「あ、あ、ひいひいひいひい……っ！♡
もお、イ……っ！♡

つあ、あああああつ、ご主人様あつ！♡ イっちやうつ！
♡ おばんちゅ被らされてシコシコされんのがすごすぎて
……っ！♡ ばんちゅっ！♡ ピンクのラブリーおばんちゅ被されたまんまで俺っ、恥ずかしいカッコでイっちゃいますううっ！♡ スティーブンひゃんの性奴隷っ♡ おばんちゅ被りのザップがあつ！♡ イくっイくっもうイくううー
♡ おばんちゅ被りがイつきゅうううううううううー
—————きんらんらんっ！♡ ひぐつ、ひうんっ♡ ひあああああああああ

あ~~~~~っ！♡

がくがく腰を空振りして果てたザツプは、あろうことか高々

[illegible]

「つ出すぞ淫乱……っ！♡ザーメン飲めド変態がっ！♡」
下腹を押しつけて一物をぐっぼりザップの胎内に嵌め、蜜壺
による贅沢なもてなしを受けつつ速慮ゼロで中に出す。どびゅ
♡どびゅっ♡どびゅるるるー~~~~♡と雄汁を注
いでゆさゆさ下腹を揺すってやれば、「ひぎゅう♡」と無様
に鳴いてまたザップが絶頂した。
「あー、潮吹きまんこすこ……♡気持ち良かつ、た……♡」
「……っ♡~~~~っはあ、……、！♡はあ、
は……♡」

さすがのザップもぐったりして、もう声も出ない。下着を被せてしまったせいで細かい表情は確認できなかったが、荒い呼吸に快感の深さが窺えた。ステイブンは目の前の愛しいひとの姿に、思わずぐくりと唾を飲む。本能的な加虐の悦びと、それとは別の、ほの暗い欲に突き動かされ、立ち上がってベッドサイドの引き出しへと向かった。目的のものを取り出して、再びザップのもとへと戻る。

「……これで終わりだと思っか……?」

「ひ、……あ、……心」

〃〃サンプルは以上です！ 読んで頂いて有難うございました！ これでだいたい半分くらいです。残りもほぼ淫語エロです。

←以下 R-18 シーン抜粋

◆ザップ×チェイン、ステイブン×チェイン妄想

「っはーーーーーお便器まんこたままないな♡ 可愛いお前の大事なおまんこ、こんな便器扱いしていいなんて……♡ ハマる♡ ハマっちゃうよこんなの♡ 気持ちいいし、なんかすっごい満たされちゃうんだもん♡ これ覚

えちやったらもう他の便器なんて使いたくなっちゃうよ♡ いつでもどこでも♡ お前にべろっってお尻出させて、お便器まんこ使っちゃいたい♡ これから事務所で仕事してるときは使わせてもらうことにしようかな……♡ 皆が働いてる場所で♡ トイレの個室にこもって濃厚お便器プレイを愉しむんだ……!♡ ほんとのほんととは堂々と、人前で使ってあげたいんだけどね♡ 執務室にライブメンバー全員揃ってるタイミングで……♡ 『おい』っってお前に声かけて、立ったままボトムもパンツもずり下ろさせてぷりん♡ っっておケツ出させるの♡ 『ごめんねちよと催しちゃったから用足すね♡』って僕が宣言してちんぽ出して、常識改変が起きてだーれも止めなくってさ……♡ 『お便器使うだけなんだから別にフツッなはずだよ……?♡』ってなんとなくどぎまぎしながらチラチラこっち見てるとかいいなあ♡ 僕は大きめちんぽ見せつけながら悠々とお前のケツ撫でたりして♡ 突き出させた尻の谷間で亀頭しごいて勃起させて、たっぷり時間をかけつつ公然挿入ぐぶぐぶぐぶ……♡ 『あーーーー♡ あーーーー……っ♡』っってお前が喘ぐし、『んーーーーザップのまんこ気持ちいい♡ よく出来たお便器まんこだなあ♡ ちんぽ大好きなんだよなあザップのおまんこは♡ とつても可愛いよ小便器ちゃん♡ 無償ご奉仕、ありがとね……っ!♡』って笑いながら僕

って僕の目の前でおっぱいに滅茶苦茶されてるチェインはチェインで顔真っ赤にしてイかないように耐えてるんだけど♡
『あっ♡ あっ♡ お便器まんこきぼちいい♡ ひどくさ
れちゃってきぼちイイ♡ チェインの見てる前でザップのおまんこおっ♡ 小便器まんこっ、きぼちいひょおおおおおおおおお……っ！♡』って喘ぎながらお前が力一杯ぎゅむんぎゅむんデカ乳揉むから、『んはあアあああああああああああああっ！♡』って処女声で鳴いてとうとうイっちゃうんだよねえ♡ 下着もしっかり貫通して、黒いボトムのお股はぐっちゃより濡れちゃってる……♡ 『おやおや♡ これはこれ、うちのザップが悪いことをしたね……♡ 粗相させちゃってごめんねチェイン、すぐにお掃除させるからね♡』って、僕はお前をけしかけて、彼女の股間を舐めさせるんだよ♡ 愛液がたっぷり染みた生地をぺろさせて、ちゅーっ♡ちゅるるるっ♡ぢゅぶるるる……♡ って何度も吸わせてやるからな！♡ チェインのおまんこの割れ目にびったり唇を当てさせて、ちゅばちゅばべるるぢゅばちゅばちゅっちゅ……っ♡ チェインの初物おまんまんのおツユをたっぷり嗅いで、ちゅーちゅー飲んで♡ 『あっあっ犬女のマン汁おいひい♡ 処女膜ついてるまんまんから出たいやらしいジューズ、ほんとにメス臭すっごいよお♡ 惚れた男の眼前で着衣イキした同僚のいけないとこ嗅ぎながらおしっこされてゆ♡ チェイン

のおまんこの膨らみ感じながらっ♡ チェインの処女まんの締めまり具合想像しながらメス汁ちゅーちゅーしてお便器プレイ……っ！♡ たまんにやい♡ 巨乳もみもみされてイっちゃったすけべな処女のお股おいしい♡ お洋服越しにちゅーちゅーできるくらいぐぢよ濡れになったチェインちゃんのおまんちょエキス♡ おっぱいおっきなチェインちゃんの処女窟からトロトロした淫乱汁飲みながらおちっこされんのさいっこお……！♡ ステイブンの前のシルバーシットにイカされちゃったボインちゃんの前でシルバーシット起してるクリトリス舌でぐりぐりぐり……っ！♡ あつまたおツユ増えてきたあ♡ えっちなお豆ちゃんべろでぐりぐりしたらまたお股ぐっちゃよりになってきたあ！♡ 一緒にイこイこ、いっぱいイこ……っ！♡ チェインのお股べろべろさせてもらいながらお便器なののおおおおおおおおおおっ！♡ えっちなお汁でべっちょべちよになった処女チェインちゃんのお股吸いながらイくっ♡ 色気なさすぎな黒スーツの下っ、やたら乳輪でつかくつてだらしない、おぼこチェインちゃんのカップばいばいのポリュミーなフォルム……っ♡ ナマで挿んだときの感触っ、アソコから愛液出まくりで乳首も両方っうーん♡ ってとんがっちゃつてるところお……っ！♡ 想像してイくねっ♡ ズーっと好きだった人の目の前でボトムの股間じつとりさせて天敵にちゅーちゅー

吸われちゃってる不憫なチェイン・皇ちゃんの♡ はしたな
 あいヴァージンおまんこの真っ黒い縮れっ毛や、ぐちよぐちよ
 にとろけるワレメちゃんや、その中の……っ♡ しつかり
 食べごろになっちゃった充血おまんこおっ！♡ だろだろぬ
 るぬろのまだ男知らないピンクのまんまんのっ、ビラビラの形
 とかクリちゃんの剥け具合とか膣穴の初物臭とかいろんなえ
 っちな想像しながら俺イクねっ！♡ ねえねえ、まんカス
 舐めさせてえっ！♡ 好きな人の前でまんカスペリペリして
 舐めてあげるからお毛々かき分けておまんこぐっばあしてく
 れよお♡ 下だけ全部脱いでM字開脚して、処女まん限界ま
 でぐっばああー……♡ っで自分でオーブンし
 て俺にまんカスどうぞして♡ ぜんぶ綺麗になめなめして
 あげるから、俺にクンニされるとこステイブンさんに写真
 撮ってもらおうよお♡ まんこにこびりついたまんカス舌で
 指してにっこー♡ っで笑ってあげるから、お前の王子様にそ
 こばっちり撮ってもらおーぜ♡ 好きな人に恥ずかしいとこ
 撮ってもらうのって気持ちいいよなあ♡ 俺におっぴろげま
 んこ舐められてソッコーでイカされるとこ、動画なんて撮って
 もらったらしいっこーに気持ちいいぞ♡ ああんっ！♡ っ
 て処女らしからぬでっかい声で喘いで未開通まんこびくびく
 ヒクつかせてマン汁溢れさせるとこ……っ！♡ いっちばん
 見せたくなくて、でもほんととは一番見せたいひとにムービー撮

られて、やあ君って淫乱だったんだねえー♡ なんてニコニコ
 普通っぽく笑われてみるよ♡ ぜーってえ頭溶けるぞ！♡
 気持ち良くてもっととひどいとこ撮られたくなるくらいまで
 脳味噌トロけちゃう♡……

◆モブ×ザップ、モブ×ステイブン妄想

カッと羞恥で体温が上がり、脳内のスクリーンに映った場面
 が切り替わる。

場所は同じく執務室だが、今度はステイブンとふたりきり
 だ。そこに来客が訪れて、応じた副官と談笑をし始める。ステ
 イブンに手招きで呼ばれたので、ザップは会釈して上司の横
 に棒立ちになっていた。白髪が目立つ髪をなでつけ、上等なス
 ーツに身を包んだ見知らぬ男をなんとはなしにぼんやり眺め
 る。

唐突に、客人の手がザップの股間に伸び、服の上から陰茎の
 輪郭を確かめる風にねっとり撫ぜた。ザップは驚くが、なぜ
 だか抵抗してはいけないような気がして、困惑しつつ隣のステ
 イブンへと顔を向ける。

「ああ、ご興味がおありですか？ これは見た目もこの通り、
 具合も一級品ですよ。仕込みはきっちり済んでおりますので」

「いいねえ、それは良さそうだ。嫉は君が？ ステイブーン」

「勿論ですとも。大切なお客様に粗相があつてはいけませんからね。僕が手ずから、つきつきりで指導してやりましたよ……」

「あ、あつ♡ あ……っ！♡」

物騒な会話をしながらも、服越しにペニスをまさぐる手は止まらない。もはやくつきりと勃起上がつてしまった箇所をあからさまに握って、しゅっ♡しゅっ♡しゅっ♡しゅっ♡しゅっ♡と下にしごかれてしまっている。

「ところで君自身はどうなんだい？ こちらの彼もとびきりだけれど、君もそうとう……接待向きのルックスをしてるじゃないか。調教できるつてことは、男をもてなす手順はきっちり分かつてるんだろう？ 札は弾むよ、バトロンになりそうな知り合いを何人か紹介してもいい。このコとふたりでどうかな？ 私のご機嫌をとつてみる気はないかい」

「ははは。ご冗談を、ミスター。僕は『商品』ではないんですよ、残念ながら」

「なんと、それはもつたいたい。使い道は多そうだよ？ せつかくの商機をみすみす逃す君じゃないだろう」

「おやおや、僕を買いかぶつておられるようで。それではたとえば、あなただったらどんな風に僕らをお使いになりたいんです？」

「うん？ そうだねえ……」

「ひう♡ う、ひいん……っ！♡」

ここでも常識改変が起きているのか、ステイブーンも客の男も平然と、というよりこの状況を愉しんでいる様子だ。初対面の相手の性器を撫でまわしている無礼な手をぶつた切るなど容易いはずなのに、ザップとて屈辱に震えながら耐えることしかできない。どうしてもだか抗つてはならないという心地にさせられて、ザップは股ぐらの布地をぱんぱんに張らせたまま、ぐつと強く唇を噛む。

「私ならどうするかなあ……。まずは君らふたりを横並びに立たせてさ、服の上からココを両手で同時にいじって、期待に濡れた勃起ペニスでボトムへ恥ずかしい染みを作らせたいね！ 君らみたいな見目のいい男が、お漏らししたみたいにお股をぐつしより濡らして直立してたらさぞかし滑稽だろうなあ……。白い肌と褐色の肌だから、ふたり揃って尻を出させて、アナルの違いを見比べる鑑賞会をしても素晴らしいものになるだろうね。色や、皺の数や、匂いまで至近距離で愉しませて頂いて……。縦割れのこなれた尻穴がふたつ並ぶのもいいし、片方は熟れて、片方は男慣れせずに硬そうな感じだったりするものもたまらないな。指を突っ込んでやってどちらが先にイくか競わせて遊んだり、交互に挿入して締めまり具合を比較しつつハメ倒したり♡ 道具使つていっぺんに喘がせて、男ふたりの淫語アヘ声ハーモニを堪能したらそれはもう最高だろうねえ♡

度も潮を噴くんだ♡ 『ボスの机でおまんこおちんこ両方丸見えポーズの連続潮吹きちよおやばいっ!♡ はだかんぼのお尻横並びにして非常識アクメショータイムすんのっ!♡興奮っ♡ 大興奮しゆうううううっ!♡ イくっ!♡ イぐうううううっ!♡ 秘密結社の戦闘力ナンバーツ―争うふたりがっ♡ 同時に潮吹きっ、シンクロ潮吹きいいいいいいいいいい……っ!♡ おまんこヒクヒクもおちんこぶるぶるも一緒に見られるのだいちゆきすぎいい♡ってアピっちゃう恥ずかしアクメっ!♡ お潮っ、噴いちゃいますうううううっ!♡ 気持ちいい、気持ちイイっ!♡ お潮っ!♡ あんっ!♡ 潮吹き見てっ!♡ お尻丸出しお下品アクメっ!♡ いい年した成人男性の屈辱尻出し腰振りお潮シャワワっ♡ たまんにやいっ!♡ たまんにやいれすうっ、おっおっ♡ 秘密結社産の淫乱露出狂ダブルおまんこおとおおおっ!♡ 仲良しでイぐううううっ、白黒色違いのぶりケツ曝しておそろアクメっ!♡ ンおとおおとおおっ、おとおとおおとおおとおおー……♡ 瘻————♡ 『って絶叫して、尿道口からダブル恥汁連射連射っ♡ ぷしっ!♡ ぷしっ!♡ ぷしっ!♡ ぷしっ!♡ ぷしっ!♡ っって息びつたりの潮吹きアクメ繰り返したら、いけない方向に極まつちゃって……♡ 『あっはあ

あああああああ——————んんんんん……
っ♡』って声を揃えて同時に小便漏らすんだ♡ 崇高な理念
に邁進する偉大なるボスの執務机に♡ 潮吹きキめすぎた淫
乱男どもの残念おしっこがじよぼろろろろろ————
っ、じよばじよばじよばじよば……♡ いっぺんにし
よんべん臭くなつた机に罪悪感抱くけど、それが悦くって逆に
発情止まんない♡……



女から女を渡り歩くHLでも生粋のクス、
ザップ・レンフロ。
そんな彼が酔った勢いでセックスした——のは、
同性の上司、スティーブンだった！
まさかまさかの大事故発生、
とりあえずなかったことにはしたもの、
それで済むほど人生なんてラクじゃない。
さてさてどうする、どうなる、このふたり——!?

◆この本には以下の内容が含まれています◆

淫語/♡喘ぎ（受けも攻めも）/羞恥プレイ/言葉責め/乳首イキ/アナル舐め/連続潮吹き/JKコスプレ/下着も女装/ひょっこフェラ/精液の染みた下着をしゃぶる/静止画・動画撮影/アナル接写/尻振り/尻文字/異物挿入/犬プレイ/くぱぁ/女性用下着を頭に被る/主従プレイ/尿道ブジー/ペニスで旗振り/まんべ/ブリッジで精液排泄/ザーメン提灯/大小スカトロ/お掃除フェラ/タマ舐め/ダブルピース/血法で性的な芸/温泉浣腸/便器プレイ/聖水プレイ/まんぐりオナニー/セルフ顔射/電気あんま/犬コスで野外露出セックス/野糞/大便を嗅ぐ・舐める・掏う/謝罪オナニー/失禁/顔射/

※ステザップ前提、具体的な記述はないですがモブザップ描写があります※

※ステザップ前提ですが複数のカップリング妄想があります※

※妄想ですが具体的なモブステ、チェーンとの3P描写があります※

※妄想ですが具体的な獣姦描写、複数の犬相手の大小スカトロ描写があります※

・ライブラメンバー×ザップ

（羞恥プレイ/言葉責め/常識改変/全裸強要/静止画撮影/異物挿入/公然便器プレイ/）

・ザップ×チェーン

（羞恥プレイ/言葉責め/胸揉み/服の上から股間をしゃぶる/体型を性的に搾取/まんカス舐め/くぱぁ/処女強奪/破瓜カウントダウン/中出しの回数カウント/精液排泄/3P/動画撮影/）

・スティーブン×チェーン

（羞恥プレイ/言葉責め/胸揉み/動画・静止画撮影/手マン/中出し精液直飲み/処女穴レビュー/二輪挿し/二穴攻め/3P/孕ませ示唆/体型を性的に搾取/）

・モブ×ザップ&スティーブン

（羞恥プレイ/言葉責め/淫語おねだり/セクハラ/常識改変/アナル見比べ鑑賞/3P/性玩具挿入/ダブル連続潮吹き/向かい合わせブリッジで小スカ/動画撮影/射精ライブ配信/陰茎に記名ラクガキ/アヘ顔ダブルピース/陰茎振り/ダブルで大スカ/）

・モブ犬複数×ザップ

（アナル舐め/獣姦/お犬様呼び/顔面に排泄・射精・排便・大便塗りつけ/温泉浣腸/アナル舐め奉仕/お便器プレイ/大小お漏らし/食糞/）